家庭雜誌

第貳拾四號

來客を待遇する心得　實意と眞率とを以て之に接せよ、

家庭の福音　家庭の春風は能く千里の外に薫じ、百年の歴史に輝やく、

佛國革命の花　ローラン夫人の光は、死に近づくに従つてますく照り渡れり、

動物の生涯　を調べんは、實に極りなき快樂ある學問なり、

小君子　如何に無邪氣に、如何に可愛ゆき物語なるよ、

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

此スコツト乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコツト乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコツト及バウン謹製

日本一手特約販賣所 米國貿易商會

横濱廿八番
神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコツト乳菓

●民友社出版書籍目錄●

毎月出版 十二文豪

紙數二百頁内外　十二冊完結

平田久著
十二文豪第一巻
カーライル
定價拾八錢　郵税四錢

竹越與三郎著
十二文豪第二巻
マコウレー
定價拾八錢　郵税四錢

山路彌吉著
十二文豪第三巻
荻生徂徠
定價拾八錢　郵税四錢

宮崎八百吉著
十二文豪第四巻
ヲルヅヲルス
定價拾八錢　郵税四錢

高木伊作著
十二文豪第五巻
ゲーテ
定價拾八錢　郵税四錢

●第三國民小說

湖處子宮崎八百吉著
●歸省　定價拾五錢 郵稅四錢

乾坤一布衣著
●最暗黑之東京　定價拾三錢 郵稅二錢

ヴヰクトル、ユーゴー著森田思軒譯
●懷舊　定價貳拾錢 郵稅四錢（背像及石版刷入）

德富猪一郎著
●吉田松陰　定價五拾錢 郵稅八錢（背像入）

德富健次郎纂譯
●グラッドストン　定價貳拾錢 郵稅四錢（背像入）

德富健次郎纂譯
●武雷土（ブライト）　定價拾五錢 郵稅四錢（背像入）

德富健次郎纂譯
●格武電（コブデン）　定價貳拾錢 郵稅四錢（背像入）

竹越與三郎纂譯
●格朗宅（クロンエル）　定價貳拾錢 郵稅四錢（背像入）

平田久著
●伊太利建國三傑　定價貳拾錢 郵稅四錢

德富猪一郎著
九版 **新日本之青年**
定價貳拾錢 郵稅四錢

德富猪一郎著
今世名家文鈔
定價貳拾錢 郵稅四錢

泥原保人著
政黨論
定價貳拾五錢 郵稅四錢

文學博士元良勇次郎著
佛國不換紙幣發行始末并信用論
定價拾錢 郵稅貳錢

佛國ブーミー原著 深井英五譯
英米佛 **比較憲法論**
定價貳拾錢 郵稅四錢

德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫
四版 **誕生日**
定價拾五錢 郵稅貳錢

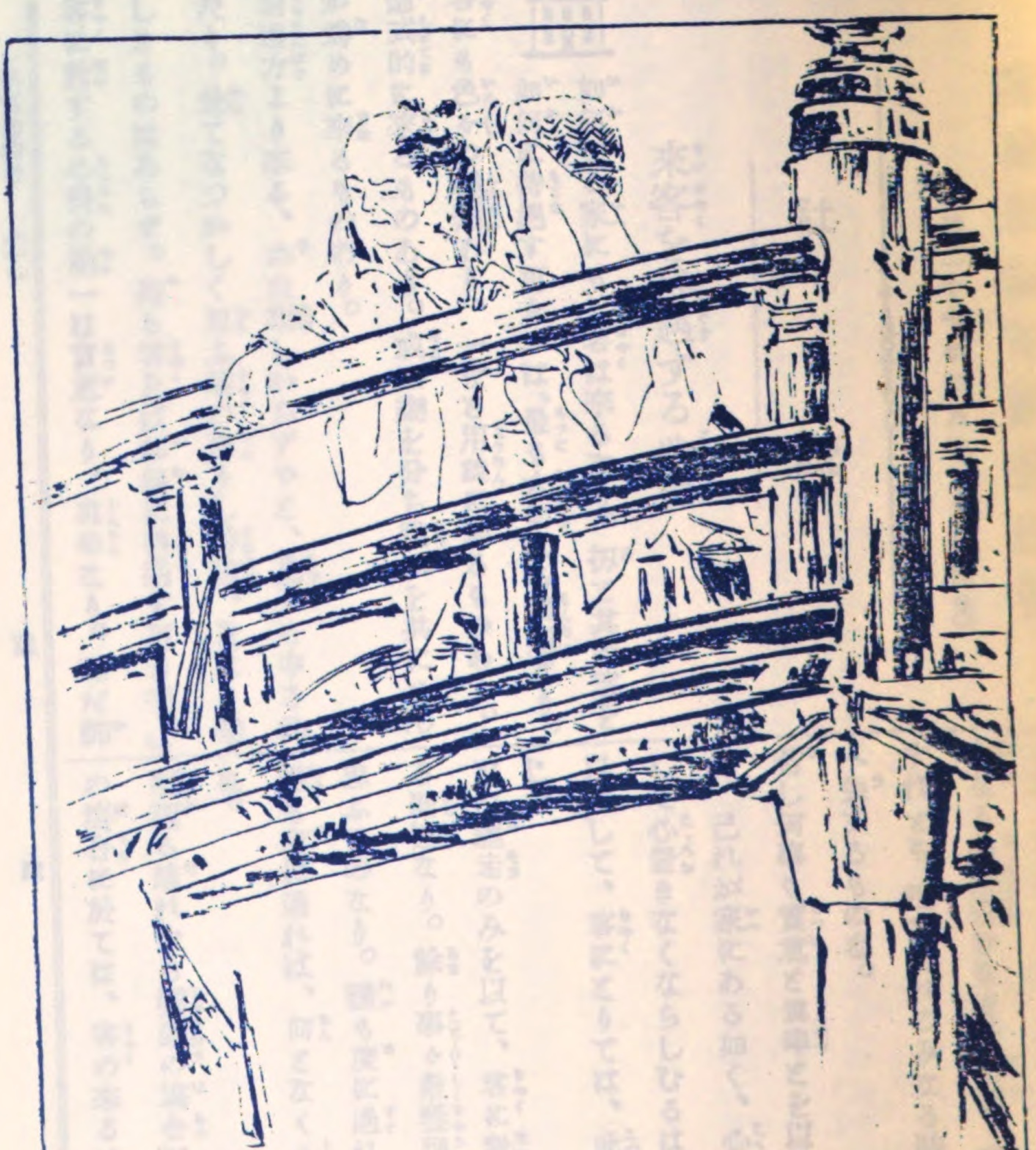
人心の明鏡處世の秘寶
六版 **一語千金**
定價五錢 郵稅貳錢

法學博士本野一郎著
多數撰擧之弊附矯正策
定價十錢 郵稅二錢

明治二十七年二月十五日發行

家庭雜誌第貳拾四號

目錄



家庭雜誌第貳拾四號
（明治二十七年二月二十五日發兌）

社説

來客を待遇する心得



如何なる家にも、客は來るなり。扨て其の客を如何に待遇す可きかは、最も大切なる問題なり。

客にも色々の種類あり、一寸と用談に來るものあり。儀式的に來るものあり。或は樂を分ち悅びを共にせんが爲めに來るものあり。

朋遠方より來る、亦た樂しからずやと、孔子も申されたり。乘てなつかしく思ふ客の來りし時程、世にも樂しきものはあらず。斯る客をば如何に待遇す可き乎。」

客に對する心得の第一は實意なり、眞率なり。唯だ御世辭と愛相さへ振り蒔けば、此れにて濟むと思ふは、大なる心得違ひなり。世辭、愛相は、暫時は人を喜ばすれども、唯だ此れのみなる時には、自然其の香味の消へ失するもの也。

若し何事も實意と眞率とを以て、客に接せば遠來の客も、己れが家にある如く、心置きなく樂むなり。客をして心置きなくならしむるは、實意の客に徹したる所以にして、客にとりては、此程有り難きものはあらじ。

又た馳走のみを以て、客に對する心得と思ふは、大なる間違なり。餘り事々敷饗應せられては、却て迷惑に思ふものなり。禮も度に過ぐれば、諂ひとなるなり。饗應も度に過れば、何となく心外千萬の感なき能はざる也。

所謂る晴れたる饗應の場合は、先づ別事として。普通の場合に於ては、客の來るは、饗應に預らんが爲めに

あらずして、寧ろ交を温め、情を親しくせんが爲めなり。若し美酒を酌み嘉殽を喫せんと欲せば、世には多くの料理店もある也。されば客の顔さへ見れば、挨拶を濟すか濟さぬに、直ちに勝手元に立ち奔り、即時に機會を外さす饗應するのみを以て、大なる手柄と爲すが如きは、大なる心得違ひぞかし。

交を温め情を親しくするは、談話より善きはなし。別段改まりて鹿爪らしく話すに及ばず、唯だ眞情實意を有躰に語り出せば、客は此を以て最も興味多き饗應と悦ぶものなり。昔は大佛宣時の北條時賴に詣るや、夜深けに入皆な眠れり、時賴手から一壺の酒を汲みかはし、紙燭を照して、戸棚より味噌を取り出し、共に之を嘗めて、一夜の快談を續けたりと云ふ。主客の實意さへ深ければ、味噌の味も山海の珍味に優るものぞかし。

客を待遇には、客として取り扱ふよりも、寧ろ家族として取り扱ふこそ、客に於ては、嬉しきものなれ。如何に結構なる馳走も、仕出し屋よりあつらへ來りたるものよりは、その家の臺所にてこしらへたるものは、何となく深き思ひ入れありて、奥く床しく思はるゝなり。此れも時と場合によれども。久々旅行したる家族が歸り來りし心持にて待遇するは、遠客、珍客を待遇するに、忘るゝ可らざる心得也。又た屡は出入する客は、普通の家族同様の心持にて、取り扱へは、自から其の道に於て、大なる間違なかる可し。又た兼て懇親の度合、未だ薄き客にても、決して之を異邦人視する勿れ。既に我が國を踰へたるものは、我が家の家族と心得、決して之を忽にす可らす。

客を待遇するには、其の氣合を見ると、特に緊要なり。用談に來るものには、用事を辨するを主眼とし。儀式的に來るものには、儀式を盡さしむるを主眼とす可し。急用ある客に、今少し待ち給へ、饗應せん抔と云ひつ

ゝ、引き留めて、貴重の時間を空過せしむるは、客に於ては、却て難有迷惑の類なる可し。されば客は何の爲めに、來りしかと云ふことを、須らく先つ察し。而して後それ〳〵その目的に應して、相當の待遇を爲さゝる可らさる也。而して如何なる待遇も實意と眞率とか其の大主義なるを忘る可らさる也。

更らに忘る可らさるは、氣轉を利かするの一事なり。炎天に來る客には、何よりも團扇と氷水とか、御馳走なり。寒き晩には、温暖なる炭火こそ、第一の饗應なり。空腹なる場合には、何は差し措き、先つ茶漬こそ難有けれ。而して斯る氣轉も、客に對して深き同情を表すれば、即ち實意さへあれば、自然に湧き出るなり。實意とは己か人より爲されんと願ふことを、人に向て施すとなり。眞率とは、その實意を素直に現はすとなり即ち己か客となりたる時の心を以て、客を待遇すれは、百に一の間違なかる可し。

論説

家庭の福音

鐵斧生

世の涙多く情深き詩人達が、如何に屢〻茅屋裡の幸福を賛美する事よ。言ふまでもなし、彼等は煤けたる竈の傍に、能く美しき家庭をみればなり。彼等の賛むるは必ずしも藁の屋根にあらず、茅屋の下に隠るゝ美しき家庭なりと知らずや。

慈愛の父母、仲よき兄弟、仲よき夫婦、善良、忠實にして勉强、且質朴、謙遜なる一家、これ詩人達が茅屋の蔭に夢想する、人の世の幸福に非ずや、地の上の天國に非ずや、理想の家庭に非ずや。而して彼等は啻に夢想するのみにとゞまらず、實に屢〻これを實際に見出し、而して之れを限りなく羨み、力を込め情を込め

て歌ひ以て賛む。

是れ詩人のみに非ず、賢者のみに非ず。世の普通の人をして、金殿玉樓よりも、黄金の山よりも、更らに一種言ふ可からざる羨望の念に堪へざらしむる者、實に美しき家庭なる哉。これ則ち人情自然の美妙の致す處と謂ふ可し。黄金、爵位、權勢の魔力の前には、人動もすれば相率ひて墜落すれども、美しき家庭の門前には惡人も善人となる。富貴は人之れを羨望して、或は妬み或は惡み、時に相爭へども美しき家庭に至りては、世人之を羨望して而して隨喜の涙をこぼす也、これを是れ家庭の福音とは申す。

善人の前には人自から正しきが如く、小兒の傍には人何となく淡泊なる如く、梅花の下には衣の袖の香ほる如く、屢々美しき家庭の内を訪ふ者は、期せずして自から其の美和春風に化せらるゝ也。如何に喧嘩腰の男も、無邪氣の小兒と白髮の老人を以て組織する、平和の家庭の眞中にては、怒鳴らんと欲しても怒鳴る能はざる可し。勤勉なる家庭の門前を過ぐれば、雞の裡の鷄鳴までが勇ましく聞へ、能く和合せる一家の傍を行けば、軒をめぐる炊煙すら、何となく天下太平五穀豊穰を吉兆するが如くに感ぜしむ。かゝる家の近傍に立つ家々はかゝる家に出入交際する隣人は、何時の間にか其の感化を被ると、或は和尚三年の說敎に優る者あらんとす。諺に曰ふ笑ふ門には福來ると、實際の眞理を言へば千百の窮鬼も笑ふ門には、七福神と化せられて來るもの也。

二十一回猛士と聞く時は荒武者の如く思はれ、其の經歷事業を見る時は、實に後の吾等をして奮激せしむるものあれども、更らに彼れ吉田寅次郎氏を、其の美しき家庭の一員として想像する時は、殊に欽慕に堪へざらしむ。吾等の心一度び茲に感應する時は隨喜の涙なからんと欲するも能はざるものある也。内外の寒飈も、

容易に家內の美和を荒らす能はずと雖も、家庭の春風に至りては、能く千里の外に薰じ、百年の歷史に輝やく。これを是れ家庭の福音とは申す也。

小說、詩歌を讀みてさへ美しき家庭を寫せる處に至れば、人悉く之れに感ず。父讀みて父として感じ、母讀みて母として感じ、夫讀みて夫として感じ、妻讀みて妻として感じ、子弟讀みて子弟として感ず、而して等しく人情自然の美妙なる琴線に觸れて感ず、其感ずるや、鶯の青春に感ずるが如く、暮潮の滿月に感ずる如く其の應ずるや甚だ自然なり。家庭が及ぼす感化の深甚なる實に玆に在る也。讀みてすら此の如し、若し夫れ眞實美しき家庭を目前に觀るが如きあらば、其の感化果して如何なる可き。

家庭と時事

自助生

家庭は一の仙境なり。花發き、鳥歌ひ、天麗かに、日永し。一重の墻內外を劃り、桃花流水杳然として世に遠きもの比々然るあり。

浮世の風の頻りに家庭を襲ふは固より不可。去りとて毫も世の消息を知らずして人事の已に幾桑を經たるやを辨へざるも亦賞すべきことにあらず。

こゝに一個の家庭あり。閑雅窈窕、子女嬉々として、其和樂を維持し、其清潔を維持し、其健康を維持し、其特殊の家風を維持するものは、之が內外の區劃ありて、別に一塲の小天地を開くが爲にあらざらんや。門墻之を劃らず、草樹之を隔てずんば、淫風醜俗家庭に塡ちて、仙境は忽ちに塵埃の山となるべし。猶何ぞ其

樂地たるを望まんや。

唯餘りに浮世に遠きが爲に、人界の風潮に取殘され、進歩の繼子として、停滯の淵に投棄せらるゝ如きことあらば、却て腐敗汚濁の因となり、遂に家庭の活潑と光明とを失ふに至るべし。

熟々世の賢婦人不賢婦人なるものを見るに、彼女等の岐るゝ所は其時事を知ると否の間に於て大なる懸隔を作るものゝ如く然り。時事に盲なる婦人にして、悪んぞ世の進歩に伴へる家庭の主宰者たるを得んや。

故に家庭の餘りに世に遠くして、毫も時事の消息に接せざるは、決して賞すべきの事にあらざらん。唯擇ぶ所は之が消息者の好否如何に在るのみ。

而して今の之が消息者たる小新聞の、其宜しきものあらざることや倘し。

女も童も小新聞を讀む。彼等は殊に好んで音讀せば人の顏を赤むるに足らんとする記事を讀む。世の風化を補ひ家庭の智見を開かしめんとするものは、宜しく之に代るべきものを與へて、因て彼等が嗜好を變じ、彼等が趣味を高め、彼等が道義を勵まし、彼等が識見を養はずして可ならんや。

故に余は一方に識者の意を此に用ひ、一方に天下の家庭の心して最も聰明に誠實に且つ健全にして而も識見ある報道を得以て其心眼を開くべき時事を聽かんことを望むなり。語に云ふ、其友を擇べ、然らざれば彼等は汝を欺かん、然らざれば彼等は汝を荊棘の鎖したる途に誘はんぞ。以て玄にすべく以て黃にすべきは、かの皎たる素絲にあらずや。世のみだりがはしき小新聞を友として、其清淨無垢の家庭を濁りに染ましむる勿れ。

佛國革命の花

（ローラン夫人の傳）六

沈まんと欲して月愈明らかに、散らんと欲して花ます〳〵香し、ローラン夫人の光は死に近づくに從てます〳〵照り渡れり。

アッベーの獄に入りて、夫人は先づ獄裡生活の整理に取りかゝりぬ。小卓子に白布被ひ窓近く置きて文臺とし、其を汚さじと食事は暖爐の上にてし、棚に大きなるトメ針をさして衣裳を掛け、トムソン四季の詩、プルタアクの英雄傳、ヒユームの英國史、セリダンの辭書等を獄中に取寄せ、或は讀み、或は書き、斯くて日は靜かに獄裡に過ぎぬ。唯靜かなる獄内にも巴里騷擾の聲、折々撞き鳴らす早鐘の音はしば〳〵夫人の耳を驚かし、朝々の新聞は天下の事日に非にしてヂロンド黨の運命旦夕に迫るの事實を傳へて、夫人をして慷慨の涙巳む能はざらしめたり。斯る時に於て夫人を慰むるには、獨り花と書のみなりき。夫人獄内に在ては尤も麁衣麁食をなし、あまれる金錢は獄裡の貧困なる四人に分配せしめたる程なるも、唯花と書籍には金錢を吝まず、げにも花と書とは夫人生來の嗜好にて、幼時一心に書を讀み入る時は何を言ひ何を示すもふりもかへらず、唯花をとりて示せば漸く眼を書より擧げて之に向へり、と。此嗜好死に到てかはらざりき。

獄に在る二十四日にして突然放免の命下りぬ。ローラン夫人は籠を出でたる鳥の如く、飛び立つばかり、車を急がせて家に歸り着き、今やまさに階段を上らんとする時、後より「ローランどの」と呼ぶ聲あり。振かへり見れば、いかめしき男二人一片の文書を差示しつゝ突立つたり。是れ再拘引の令狀なりき。斯くて夫人は

脱るゝ間もなく亦捕はれ、サンペラヂーの獄に入りぬ。獄は夫人が十二三歳の乙女の昔嘗て寄寓したる尼庵に近し。

纔かに黒暗を脱して黒暗に入る、夫人の心中や如何なる可き。然も此獄にある四ヶ月の間、夫人は更に落膽せず、猶も獄中より窃かに書を送つて同志を鼓舞せり。ブゾオに書き送つて曰く、「吾友よ、失望するなかれ、フイリッピの野に於けるブルタスは羅馬を救ふ能はざるを失望するの早きに過ぎたり」と。ブゾオはヂロンド黨の俊秀なる一名士、ローラン夫人之と交を結びて二三年、敬慕何時しか苦しき愛慕に化して夫人は戀に惱され、獄中にあつてもブゾオの畫像を始終身邊に携へたり。此不幸なる戀、如何にローラン夫人をして山岳黨殊にダントンに對して殆ど盲目的執拗一歩不讓の嫌厭を懷かしめたるか（蓋し戀になやめる婦人は古來よき政治家たりし例なければ）如何にブゾオをして議院に於てしば〳〵法外に憤怒し失望せしめたるか、如何に夫ローランをして無氣力に陷らしめたるか、其關係容易に解き難きものあらむ。余輩は唯之を不幸の戀と名け、而してローラン夫人自から之を夫に明してあへて德義の軌範を出でず、あへて一身の私情を以て家國の事を廢せず、否寧ろ一種獻身的反動的熱情を以て國事に盡したるの跡を擧げて已まむのみ。姑らくこゝに其是非を言はざる可し。

天命を知り自から信ずる篤き者にありては、場所として住む可からざるの場所なく、時として爲す可からざるの時なし。ローラン夫人再びサンペラヂー獄裡の身となりしより、花を取り寄せ、書を取り寄せ、壁と床との外には何もなき室を飾り、英語を學び、圖書の稽古をなし、時には珍らしき料理の趣向を案じ、或は親切なる獄吏の妻の貸與せる琴搔き鳴らして鬱を散ぜり。

時はまさに千七百九十三年の秋、革命の狂瀾山の如く

巴里に立ち渡り、斷頭機は血に饜てくもり、ソヨ吹く風に腥き大慘劇大騷亂の時節、サンペラジーの獄中日長ふして年の如く、已に身を家國に許したるの烈女はまた一身の安危を心に置かず、靜かに身の過去を思ひ國の將來を思ひ、鐵窓の下筆を援ひて「自傳」「革命記事、人物及逸事」の二篇を書きぬ。英國の人ウイリアムス孃ローラン夫人を獄中に訪へるの記に云ふあり、ローラン夫人をサンペラジーの獄に訪ひしに、夫人は何の境遇に煩はさるゝ所もなく、平日の如く沈着に、恰も大臣の官邸に於て談話せし時の如く、其狹隘なる獄室に於て快活の談話をなしぬ。夫人は數卷の書を手に入れ、余が訪へる時はまさにプルタアクの英雄傳を讀み居たり。夫人は已に覺悟を定めたる旨余に語られぬ。今年十三歳なる夫人の最愛の一女の消息を問へば、夫人は忽ちハラ／＼と涙を流し、貞人童女の事思ひ出でゝは自由の犧牲たる勇氣も妻たり母たる感情に沒し去られぬ。

殉國の烈婦未だ必しも貞婦たり慈母たらずんばあらざりしなり。

十月三十一日、ヂロンド黨の名士二十二人斷頭臺に上れるの日、ローラン夫人はサンペラジーの獄より其朝までヂロンド黨諸士の住たりしコンセルゼリーの獄に移され、是れより數度の審問を受けたり。夫人は已にとく覺悟を定め、身は已に半ば浮世の外にありき、然れども涙は終に未だ夫人をゆるさゞりき。夫人に給仕する一婦人、人に語りて曰く、他人の前にては夫人も元氣よく見へ玉へど、密室にありては夫人は時に三時間も窓に倚りて啼泣せらるゝなり」と。夫人此最後の牢中に在る僅かに一週、然して其温和の風は獄裡の四人獄吏までも懷け了れり。愈最後公判の前日、夫人の辨護を引受し某、獄に來り訪ひしに、夫人は指環を脱して之を贈り、到底定まれる運命なれば無益の辨護に身を

危ふする勿れと勸めて返へしぬ。

明くれば最後公判の當日、ローラン夫人は雪白の衣着て法廷に出でぬ。結ばざる髮は波の如く肩にゆりかゝり、鮮かなる血色、海の如く碧く澄んだる兩眼、いき〳〵として雪の衣と掩映し、光りかゞやきて少女の如くにぞ見へける。法官はさま〳〵の僞證を以て夫人を罪に陷れむと試みたり。ローラン夫人此際の答辨は、佛國革命史中尤も悲壯なるものゝ一なり。ヂロンド黨との關係、半點、疚しき所なきを明かに辨じ去つて、夫人は猶も言葉靜かに、

眞正の大人は、私情を去つて、身は人類同胞に屬するを忘れず、報酬を千載の後に待つ。余は謹むで宣告を待つ。迷惑姦惡の徒、潔白者を誣ひて斷頭臺に上す時は、是れ潔白者已に勝利の門に達したるなり。善を滅し義人の血を飮む此不幸の土をば、余は喜むで去らむ。天の神！願くは此不幸の民を導き玉へ、余は唯此民の自由を是れ切に祈る。

斯る熱切の言も、非法の法官は更に頓着なく、隱謀に加はつて惟一不可分の共和を害せんとすとの廉を以て、終に死刑の宣告を下しぬ。宣告を聞ひて夫人は靜かに立つて曰く、

卿等は余を以て卿等の逆殺せる諸ろの大人と命運を同うするの價値ありと定めらるゝか。余は彼等大人の斷頭臺上の沈着なる擧動を學ぶことを務めん。

運命は已に定まりぬ。ローラン夫人は其日獄に歸りて心靜かに知已親戚に遺す可き數通の書を認めたり。其愛する一女に遺すの書の末句には斯く記しぬ、曰く、御身宜しく兩親の子たるに耻ぢざる樣務めよ、兩親は御身に摸範を殘す、御身若し此摸範を學んで益するあらば、御身の生涯も亦無用の生涯にあらざらむ」と。

日は暮れ、夜は明けて千七百九十三年十一月九日となりぬ。

ローラン夫人は同じく死刑の宣告を受けたる一名の男子と囚人の車に乘りて斷頭臺に向ひぬ。車はポンヌーフの家を過ぎぬ、家は夫人が猶髮組み下げて裾短かき衣着たりし少女の昔父母と共に樂しく棲みて常に窓に倚りて夕暉を送れる其家なり。ローラン夫人の勇氣は此悲痛の懷古の爲に撼かざりき。夫人は「眞直に車上に坐し、眼は輝やき、顏色鮮やかに、唇に微笑を浮べ、恐れ震ふ同伴の男を慰め勵ましつゝ」此家を過ぎぬ。

車は轉々斷頭臺に向へり。ローラン夫人の胸中には浮世の塵念全く晴れて、言ふ可からざる崇高の感想潮の如く湧き起れり。夫人は之を記しとゞめむと、紙筆を請ひぬ。不幸にして此請許されずして已みぬ。

車は斷頭臺下に着きぬ。第一に刑臺に上る者は他の苦痛を目睹せざるを以て、婦人は常に第一に臺に上るの例なりき。然もローラン夫人は同車し來れる男子の震慄自から堪へざるを憐み彼に向つて言ひぬ「御身先づ上られよ、願くは余が血を流すを見るの苦痛を御身に免れしめよ」と。劊手に向つては曰く、御身は定めて婦人の最後の要求を拒まざる可し」と。

刀下り風起り血迸る所一個の頭已に落ちて、ローラン夫人の番は來りぬ。斷頭臺の近くに尨大なる「自由」の像立てり。ローラン夫人まさに臺を上らんとして「自由」の像を打眺め、一揖して左の言は覺へず唇に迸りぬ「オー自由よ、幾何の罪惡か爾の名によつて行はるゝぞ」と。

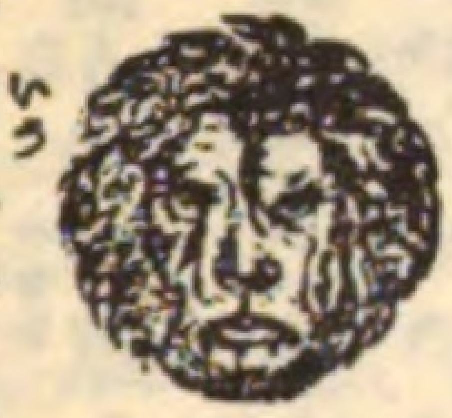
電の如く落ち來る大刀四十一年の生涯を斷切つて、ローラン夫人長く歷史の人となりぬ。

* * * * * * *

ローラン夫人の斷頭臺の露と消へにしを聞くより、かねて夫人の愛顧せる一婢一僕は法庭に馳け入りて、己も共に斷頭臺に夫人の跡を逐はむと請ひ、ヂロンド黨

の名士ブッソオは數日の間人事を辨ぜざりしが、此等にもまたいたく此打擊を感じたる者あり。ローラン夫人の死後數日、ルーエンより巴里へ通ふ街道の木の下に、劍にて胸突貫きて死し居たる者あり。是れローラン其人なりき。　（完）

科學



動物の生涯（一）

世界の動植物をなしならべて、人間の一日、否な一生を費やして、之を調ぶる丈けの價を有せざるものはあらず。その搆造發達、習慣、地理上の分配より、その動物と他の動物との關係、昔の有樣等を一々調べんは、實に極りなき快樂ある學問なりて

我等は人類の眞友なる犬、貴とき馬、忍耐強き牛、おとなしき羊、其他の家畜を見るに、昔は牛樣馬樣とて拜せし反動として今は死したる器械を扱ふ如く苛酷なる待遇をなすことあり、かゝる人は少しく動物の性質をわきまへて憐の心を生ずべき也。

さて動物の生涯は殆ど極まりなき變化あり。或る動物は陸に住み、或る物は水に住む。その中にて或るは川に、或は湖水、池水に、或るは海邊、他は大洋の深みを古郷とす。或るひは土の中に穴居するもあり。空中に家を探すもあり。北極の氷の中、燃ゆるが如き砂漠の內、種々の場所に住む中にも、或る小さき動物は、百三十度の熱湯の中に住む。食物の如きも、或る者は肉食して戰爭を營業とするあり。或るは奸智に長けて敵を謀計の中に落すあり。他は植物を食とし、もしくは草の果 木の果に、露命の繫ぐ。而して何れの植物にても、動物にても、一として己が身の他の物の食物に

ならざるはなし。かく組立、形の大小より、凡ての道々迄も、極め行く時は僅か一個の動物に、數もなく變化あるを見るべし。

生　長　と　變　身

變身は、虫の卵が母の胎より出でゝより、小供の時分の生長する有様と、おとなとなりて成熟の時分の有様とは、全く異なりたる様となるを云ふ。この驚くべき變化は一種の寄生虫によりて説明するを得べし。この虫少年の時分は、六本の足にてさも活潑らしく彼處此處を走せ廻りけるが、やがて我れと我が身を花の中に隠し、呼吸を凝らして蜂の來るを待ちつゝあるよと見る間に、運こそ悪しけれ、一匹の蜂例の蜜を吸はんと思ひて、何氣なく來りて蜜を吸ひ、好き寳藏を作らんと、即ちそこに五六の間數ある室を建て、蜜を貯へ卵を生み付けて安心して立ちされり。先きより隠れて中の様子を見居たる小虫は舌打ち鳴らしてはひ出で、猫の留守には鼠の世の中と、蜂の留守の間に、寳藏の門口をおし破り、中に安全に休みたる蜂の赤ん坊を殘らず腹の肥とし、尚ほ飽き足らずして蜜をも嘗め始めけるが、その罰にや蜜を飲み始むる時、先きの活潑なる少年の運動ありし虫の躰は變りて浦島の玉手箱にはあらざるも、見る間に自分の躰は白き蠐螬と變りて、樂しきか、苦しきかは知らざれども、口を下に向け、ゆら〳〵と蜜の上に浮び出す。これ小虫變身の有様なり

同じ種類の中にても、又種々の差別あり。例へば同じ蜂の種類の中にても、或るものはヂムシの如き蛾となり、或るものは毛虫の如くなる、かく色々の種類あるは、全く生活の異なると、食物の性質とに由るものなり。

生れ立ての道具

かく食物や、土地や、生活によりて變化するをば『適應』と名くれども、或る種類によりては、昔より何十

年、何百年と、年を重ねる中に變化し來れるものあり。實に大ていの動物は、大と小との異ひこそあれ、蟬や蝶の如く、甚だしき變化こそなけれ、多少の變化なきものは稀なり。たとへば鳥の如きも人間の目にては見へざれども、親鳥の胎より出で立ての卵が、やがて雛となる迄には、卵の中にて幾許の變化をなしたるかを知るべからず。進化論を唱ゆる人々云へる樣、虫にても、獸にても、昔より段々と變化して來りし、所謂『年代の變化』なるものは、現在その虫の一生の中に顯はれざるはなしと。即ち蝶ならば、蝶が卵より毛虫となり、一變して蝶となる變化の有樣は、數百年か、數千年かの昔、始めて蝶の生ぜし時、卵にて生じ、後數十年を隔て、毛虫となり、又幾年かたちて、蝶となりし、その年代の變化が、今の蝶の一代の中に現れて卵より毛虫となり毛虫より蝶となる也。と

こゝに面白きは、生れ立ての形なり。牛にても、馬にても、猫にても、犬にても、はた獅狼の如き獸にても、生れ立ては其形能く相似たり。成長せば蟹と蝦魚と、寄宿蟹は、各々形異なれども、生れ立ては何れも別つべからざるが如し。この事に付きては馬と人間程面白き關係を有せるはあらざるべし。馬の頭と人の頭は、形の上より云へば、馬は長く、人間は丸くして、大に異りたる樣なれども、その骨の數と云ひ、配置と、云ひ骨と骨との關係と云ひ、全く人間と仝一なり。たゞに骨のみならず、その筋の附着する面の高低も、神系の通過する穴も、少しも違わず仝じ樣に出來居れり。

色

動物に種々の美はしき色あるは、たゞに人の目を喜ばしむるためならで、大ていは、その身の保護のためなるが、中には雌雄の愛情を引き起すの目的なるもあり。孔雀鴛鴦の美しきは、後の種類に屬せるが、魚の黒くして人類の目を逃れ易きが如き、北極の獸類の白くし

て、雪とまがふが如き、獅の砂漠の色に似たる、虎の毛色の縞となりて、雜木の入り亂れたる間に隱るゝに適せる、豹の脊の恰も木の葉もる日の蔭の映じたるが如き形あるは皆な身を保護する爲めにして之を名けて『保護色』とは云ふ也。毛虫の色の青くして、人目にかゝり難きと、藻魚の恰ど藻の影の地上に映じたるが如き色なるは、誰にても見る處なり。

動　物　の　社　交

蝶の如き、孔雀の如き、一種の動物は、人類の目を遊ばしめ、鯨の如き、象の如きは、その大なるによりて人を驚かしめ、雪の花の如き、水中の虫の如きは、精密なるにより人の魂を奪はんとす。されども動物社交の面白さには、何物も及ばざるべし。動物の社交と云ふ事は、雁が列を爲して行くが如き一時の集合を云ふにあらず、又た假令長く共に集るも毛虫、雨子虫が濕ひの加減、或は木の葉の蔭にたゞ寄り合ふが如きものを指にあらずして、規則あり、法律ある交際を爲すものを云ふなり。

ビーバー（木食獸）もその社交を爲す動物の中にはあれども、我國に通常に見るを得べきものは蜜蜂なり。蜜蜂の蜜を貯へ、巢を作る樣の見事にして規則あるは、感ずるの外なけれども、蟻の混雜なる生活の樣には比すべくもあらず。蟻には殆ど一千の種類ありと云へば、その樣を說かんは中々に困難なる業なるが、或る人之を飼ひて試驗したりしに、十五年間生き長らへしものありき。蟻の世界は少年と勞働者と、一匹の女王とも、母とも云ふべきものとなり。この女王、始めは羽を持てるが、結婚後はその羽を失なひて、羽なしとなり、再たび巢を出づる事なし。奇態なるは其女王が通行する時は、如何なる蟻にても頭を振り向け、恰も喜悦の色あるが如し。或る時誤つて蟻の女王を蹈みつぶして殺せし事ありけるが、他の蟻の死したる時のごとく、

巣の外におし出すが如き事はなさで大切に巣の一方に屍を引き行きて、一週間の長き間、恰も生ける女王を慰むるが如く、其周圍に寄りつどひて、悲を表したりと。その復活を望みし心おし計られてあわれなりけり。

蟻の社會は時に五十萬匹の多數によりて組み立てらるゝ事あり。何程多數なりとても、同じ仲間の物は、たゞの一度も喧嘩等をなす事なきは、人類のため一つの好き摸範なり。されども し他の仲間の蟻を一匹にても連れ來らんには、巣の中の蟻は忽ち足を喰へ頭を喰へて引き出たすべし。是を以て見れば、己が仲間中の蟻は、兼て悉く知り合ひて居るなるべし。されどももし蟻の巣を二つに隔て置く時は、一年位は互に行通もなすべけれども、遂に忘れて互に敵味方となり、分取ものを爭ふために、殺し合ふに至る。その親切に至りては、實に感涙すべきものあり。一匹の蟻過つて足を傷け、久しく立つことを得ざりしに、三ヶ月の長き間、他の蟻は絶えず食物を運びて之を養へり。又た或る時病身の蟻、巣外を散歩しつゝありけるに、茲にて敵なる蟻に出遇ふて忽ち辛き目に遇ひければ、之を見し余は氣の毒に思ひて、二匹の仲を分けたるに、反てあしかりけん、病身の蟻は大に勞れて、横さまに倒れて起つと能はざりしが、敵の組合の蟻は何匹となく其の傍を過ぎけれども、少しも之に目を付くるものなかりしが、やがてその組の蟻が通りかゝるや、忽ちその傍に倚り、樣々に慰むる樣に見へけるが、やがて足を合みて、己が巣へ引き行けり。

我等は細かに蟻に注目して、その完全なる和親を見る時は、彼等を自動する虫と、知覺なる人間より分別するに苦しむ計りなり。然れども彼等と人間の意思の度を比ぶる時は、その度の如何に異なりたるかを知ん。

文藝

小君子（上）

湖處子

小君子は記者か世の慈父慈母の口を藉りて、幼なき友たちに語らんと願ふ所の小話にして、慈父慈母の一讀を値すれは幸甚し。

（一）食物よりも嬉しかりき。

お千代は貧しき小作農夫の子にして、幼なけれとも良き娘なりき、父は毎日日に先ちて出て、日に後れて歸り、母も亦その後に隨ひつ、夫婦野を家の生涯なりき、かく骨を折りてこそ、兎に角烟はたつもの丶、猶ほ家賃地代と云ふもの丶あれば、容易くは世を過きかねつ。されば千代は、兩親の氣まづき私語、母の時ならぬ嘆息など見きく度に、小供なから、いと悲しきことに思ひ、少しなりとも親の助とならむものと、朝夕の水くみ、煮たき、拭掃除、燒つけひろひなと、かよわき手足のつ丶く限り、母に手傳してありしが、固より心がけよき子なれば、直ちに物の加減をのみこみ、あはれ遊ひさかりの年にて

秋來ればいつ方も苅いれに忙はしく、お千代が親たちも晝食に歸らむ暇とてなければ、お千代は毎日晝食を野にはこひぬ。親たちは業につかれて、如何にお腹の空て居ても、繊き手に籃をか丶へ、日にほてる面を掩ふ手拭を涼しき風に吹かせつ丶、來るお千代を見れは、食物よりも嬉しく思ひき。

（二）誰をも愛し誰にも愛せられぬ

記者か知れるある家の娘に、いと子と云へる愛らしき少女ありけり。いと子は毎日學校にかよひ、學校にても慧き弟子と評判されぬ。

いと子は生れつき花か好きにて、父母に伴はれて縁日

にいつるごとに、髪かさり一個買つて貰へば、あとは盆栽の花を望み、次第に花の殖るにつけ、何卒自分の花園を作りたくなり、其事を母上に告げ、母上より父上へ伺ひしに、父上も至極賛成にて、平日大人しき褒美にとて、宅の庭の一隅の地面を、いと坊の花園に遣はすとのことなりければ、いと子の喜は一方ならず、是まで蒐め置し盆栽を盡く移し栽へ、茲に桔梗、苅萱、女郎花、男へし、朝顏、夕顏などの愛らしき花園の出來しが、いくら植ても地面餘れば、いと子は猶ほ叔父さんより唐錦、盆花を貰ひ、叔母さんより秋海棠を貰ひ、其外猶ほ鳳仙花、月見艸、百日紅に、旋覆花に蘭に、鷄頭と、大凡あるほどの艸花は皆植へければ、見事なる花園出來、父上よりも朝夕の散歩の折々、立派の花園と賞せられ、いと子の滿足は譬へむものもなかりき。

斯うして花園を作りて見れば、花は子、自分は親とて育て、孰れの花も丹精して育てしものなれば、片落なく一樣に大事がり、斷なく人のさはるを決して許さず。落葉をのそき、艸を取り、針さきほどの艸の芽出ればすぐに引ぬき、毎晩景、注水管をもつて水をそゝぎぬ。斯く手いれして、朝々咲ふゆる花を數ふるが、いと子の上なき樂なりき。

糸子は花園をつくりてより、一層慧き弟子となれり。最も著しき名譽は、同級中第一の作文家と呼ばしめてけり。そはいと子は花園をつくりて、多くの花を知りたるのみならず、自身に花を守り育つるとによりて、花より外の多くのこと、例へば日は花をさかするもの、雨は艸を生ずるもの、風は花を蹬らすもの、露は朝々花の上や艸の上にたまれるもの、蟲は夜な夜な花園に來てなくものなど、種々のことを知りたるが故に、餘の生徒の、先生のをうつし取りて、花といへば異口同音は「花は艸木にさくものなり」と云ふに引かへ、

「花は花園にさくものなり」とつくり、松といへば、他か一様に「松は四時青き木なり」と云ふとは違ひ「松は花なき木なりと云ふ如く自分に考へて自分につゝり、大概の題には先生の手を藉らざる故に、中々の評判ものとなりき。

いと子は今年十六歳となり、某女學校に通ひ、つきあひ難き數多の女生徒の中にあつて、誰をも愛し誰にも愛せらると。

(三) 小女と猫

今日は朝より雪ふり出て、晝頃には愈はげしく、地の上既に三四寸ほどもつもりぬ、嵐は絶えず戸をうちたゝき、透をひらいて入らむとし、偶々來る人ありて戸を開けば吹雪は忽ち家庭を透して、一直線に火爐の焔を吹きあほり戸にて截ち切られたる風は、後に白きつめたきものを散せり。「風ふけこふけ」と樂しく歌ひし後の山の木の實ひろひも、今日は休みなむ。竹馬大臣の太郎も次郎も今日は見えず、羽子つく友も一人もなく、皆炬燵にうつくまつて寒をば凌げるならむ。されば此家の娘のお留も、最前學校より歸りたるまゝ火爐の傍にうづくまり、薪さしそへて暖まれり。かくて十分に暖まり「學校ごと」とて同じ様な小さき熾を、灰の上にならべなどして遊べる折から、雪あらしのビユーと後ろの窓より吹入る同時に、猫子の様なもの影ぼつとりと窓にのぼり、兩三度身をふるひて寒けにもニヤーウと泣きぬ。

「チ、此の寒いのに、何處の猫か」と、お留は立つて窓をあくれば子猫聲の調子をかへて又ニヤーウと云ふ。こは谷一個越えて隣家に此頃飼へる子猫なるか、この雪に道にやまよひし、思ひもがけぬ窓をとめ來て、寒さにこゝへて小くなりて、ウチ〳〵と障子の根によりそひ、訴ふる様な目して、悲しげにお留を見たり。

「チ、、チ、」と掬ふが如くかゝへこむで、追ひくる雪

を障子にせきとめ、子猫を火爐の傍におろし、おマンマにチカヽをかけて猫に食させ、柴さしそへて食ながら暖まらせ、食へ了ひて猫をわが膝の上にあげ、背を撫で、雪消の露を拂ひてやりぬ。

果報よき猫は、目をとざしてゴロ〳〵咽をならし初めぬ。お留は可愛らしさに堪へず、猶ほ一さし指を以て猫の頷を撫で〻やれば、猫めは横着にも頷さし出して撫でさせおきて、自分はゴロ〳〵睡りこけ、恩人の懐に入りて、雪ふかき谷を何時わが家に歸りたりしも知らず、懐より疊におろさるや否爪うちこむで快よげに背丈をのべ、身ぶるひしたるま〻、辱なしとも何とも云はず、スタ〳〵奥へかけこみぬ。

然れどもこの少女の親切は、この記憶乏しき猫といへども、全く忘る〻能はぬと見え、折々此あたりに來るごとに、此家をおとづれ、お留を見ては小聲にニヤウ〳〵と慕ひより、其足頭をすりつけ、前後より慕ひまとひ、存じかけもなき馳走にあづかりて、ニヤウ〳〵と馳走になり、懐けば懐かれ、頷なでらるれば撫でさせてゴロ〳〵睡りつ、お留をば母とも思へる樣なりき。

（四） 何をも愛する少女

はつ坊は記者が隣家の娘なり、今年であけて六歳になれり。赤坊の時から愛らしく、誰からも愛せられたるが、生ひ立つに從ひて愈愛らしくて誰をも愛し、隣のみい坊も遊べば、對家のはあちやんとも仲よしなりき。去年の暮、母樣に赤坊を生むでもらひ、自分は姉ちやんになるなら、大人しく負ぶすると待ちて居たるが、其甲斐もなく、赤坊は生る〻と、其儘居なくなりければ、爲んかたなしに寐ン寐の枕を負ぶしぬ。程なく記者の家に狗が數多生れ、其一匹はつ坊が宅に養はれしより、はつ坊は狗の友となり、早朝より起き出で〻、犬と駈つくらして遊びたり。されば狗もまたはつ坊の傍に居なければ勢なく、若しはつ坊が寒

をひきて臥せるとあれば、自分も床の下にうづくまつて、病人の様に塞ひで居るなり。

はつ坊は猟犬ばかりでなく、蝶を見れば蝶を愛し、とまれ〳〵と袂にとまらせ虫をきいては虫を愛し、籠に入れて軒端にかけ、秋の夜な〳〵虫の聲をきく〳〵臥せりぬ。はつ坊は又鳥が好にて、烏がかア〳〵と云へばはつ坊もかア〳〵と返事し、鳶の聲と鴈の聲、雀の聲と燕の聲、雲雀の聲、一々きゝわけて其眞似を、しわけて鶯が裏の竹にきて「ホホーホケキヨ」となく時は、思はず飛び出でゝ手をさしのべ、自分の掌にとまらせむとしては、いつも母様に笑はれぬ。

斯様に何でも愛すれども、とりわけて主なき犬や、饑へ凍へたる猫や、乞食など、不仕合なものに心をとめ自分くらゐな子が、ボロをさげて、寒き日に門に立つ時は、悲しくなつて母様と、母様におマンマやおあしを貰つて、其子にめぐみ、其子が嬉しさうにいたゞくを見て、始めて心に安堵しぬ。記者は斯かる少女の健全長壽を祈りて止まず。

勉學を粧ふ子（下）

霞村

第六場　伯爵夫婦

夫人　妾は是程心がやき〳〵してなりませんのに、吾夫は何故そんなに冷静て居らッしやるので御坐います、秀坊は可愛とは思召さないので御座いますか？

伯爵　子じやものを何んで可愛くないとがありますか、可愛ければこそ……

夫人　其ならば何とかして頂戴な、吾夫到底も見付かりますまいか？森は中々廣ふムゐますから。

伯爵　すれば倘好矣、上々吉といふものじや。

夫人　何で御座いますつて？あの暗い、寂寞しい、狐の出る森で夜を明させますつて？其は餘り無慘らしう

御坐います、吾夫それで何點が可愛と仰しるのです？

伯爵　秀坊も多分眼が覺めるだらふが、其身にも亦今晩は考慮へてもらいませう、是といふも畢竟は平素餘り甘やかして、盲目滅法に可愛がりたとので、秀坊の考には自分で森の中へ身を隱したら、必らず勉强が過ぎて失心したので路に迷ふたらふ、と思ふて人が搜索ねるに違いない。と斯ふ考へて隱れたのじやから、放擲ッて置けば今に獨りで來るよ、決して心配しなさるな。

夫人　其でも妾は……

伯爵　縱令小兒じやつても年齡も十一になるし、况して此月夜に、高の知れた邸內、路の知れないともあるまい、假令知れないとした處で露泊して身を錬るも亦好いわ。

夫人　其樣とが出來るものですか、宜ございます、吾夫が御見付なさらないならば、妾一人でも見付けます、ア、餘り

伯爵　困るねー、左樣心配おしのなら仕方がない富松を遣りて搜索させやう。併し斷つて置くよ、最う此上は何事も聽きません、此丈が余が許可す極度じやから、折角敎へ樣と思つて俟つて居た、好機を失しては大變じや。

＊＊＊＊＊

先刻。出てたる友人歸り來る。

友人　餘程搜索ましたが何分夜の事で分りませんて甚だ遺憾で御坐います。夫人何卒提灯を一張御貸下さいまし。而して物慣れた案内を。

伯爵　誠に御苦勞樣でした、實は申上たいとがありますから、先此方へお遣り下さい。イヱもう决して御心配下さいますな。

共に一室に入る。

第七場　秀麿（森の中にて）

秀麿　僕はどうしたんだろうなー、情ない、何故彼樣考慮を起したら？　誰か來れば好い、路が少しも分らない。父樣！　父樣！　聞こえないか、母樣—母樣やーー！

茲處に至りて聲を放つて悲泣せしが、乍ち物音に耳を聳て、悄然又慄然

かサ〳〵するのは狼じやないか知らん、此間誰か狼の吼えたのを聞たと謂つたが。

かつぱと地上に伏して聲を呑んで泣く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

富松　其處に居るのは誰？　エ君は若樣で御座いますか？　何うしてま一日も暮れたのにこんな處にお在で御座いますか？

秀麿　オー富ちやんよく來て下すつたと、僕ねー路に迷つて困つて居た處でした。

富松は驚愕の眼を以て左視右眄せしが、忽ち吹出して。

若樣お戯事なすつちや可ませんよ？　失禮では御座いますが、何うか爲さりやしませんか？「富ちやん」なんで！　私は其樣大した者ではありません、矢張り何事も識らない馬鹿兒で御座います。それ若樣はお覺えでせう、華柔によい手を持つ居る富松で御座います。

秀麿　富ちやん僕失敬でした、後生だから堪忍してお呉れ。而して早く家へ連れて行いてお呉れ。

富松　若樣もうお調物は濟みましたか？　先刻伺ませんでしたが、お月樣はどの位大きいものですかーー？

秀麿赧顏爲す處を知らず、

何卒最う決して失敬な事はしないから、恕してお呉れ。是非々々。

富松　御承知の通り私は馬鹿で、醜男で、何事も識りませんが、其代り決して惡意はありませんから、惡い

樣には致しません。兎も角も今晩は此寐臺の上で御寢なさいませ、何れ明朝お父樣の許へお連れ申しませうから。

秀麿　寐臺つて何處にありますか？

富松　(大地を打ちて)此です！此か私の寐臺です、一人には隨分廣いから、何處でもお好な處へ陣取を遊ばしませ。

秀麿　何！此處へ寐るのだつて此の何にも無い處に？

富松　私は一國の天子樣でも此樣美しい處に御寢なさるとは勿からふと思ます。御覧遊はせ、若樣の御頭の上には大きな數知れない金剛石が輝き、又美しい銀の大燈明が付てありますや。

秀麿　其では爲樣がない此處に寐やふが、僕は空腹になつて來て困つたなア。

富松　空腹におなりなら召上りませ。ソレ其處に馬鈴薯がありますから。

秀麿　其でも是は生じやないかね。

富松　宜ございます、今私が火を燃て直に料理て進ぜませう。

秀麿　どうして火を出すの？　而して何處に炭や薪はあるの？

富松　若樣が御讀になつた書籍には、何にも書いて有りまんでしたか？

秀麿　見えなんだよ。富ちやん。

富松　ハヽ、其では遠い國の歴史とかいふ、美麗しい書籍を幾卷お讀みなさいましても、御飯を調理て食上るとは出來ませんのですね。オヤ〳〵左樣ですか。御覧遊ばせ、火は此うして作ります。と衣嚢より燧石を出しカチン、カチンと之を打つ、子火が出ましたらふ、最ふ燃え付ます。

乾燥たる落葉をかき集めて火を移し、上に輕く枯木を

載せ、力を極めて之を吹く。火は炎を上げて盛に燃ゆ。乃ち地を少し堀りて馬鈴薯を埋め。焦げない樣によく番をしなくつては可ません。どうです若樣御厨所に何時も此樣よい火か御坐いますか？へ、もう出來ませうよ！

秀麿　富ちやん種々御世話樣になりて誠に難有う、どうして御禮を申したら善いか知れない。

富松　勿躰ない、御禮なんつて何で御坐います。御禮を受たがつて親切を盡す者は世にありやしません。其はさうと少し御待ち下さい。直其處に枯草がありますから、持つて來て蒲團を拵へて上ます、そうしますと若樣は皇族の御子樣方の樣に暖々と御眠なされます。私は行つて來ますからよく馬鈴薯に御氣を御注け下さい。

勇ましく謡ひながら出て行く。跡には獨り秀麿後悔の念止み難く、

此樣賢しい兒を蔑すんだのは實に僕が一生の失策だ！僕は此の活潑な擧動を視ると實に我ながら自分は小さく、情なく見ゆる去事は不可迄、最も二度とあんな馬鹿はしないとだ。

と枯枝折りくべ、彼邊此邊行きつ戻りつなす。

第八場　秀麿及富松

富松は枯草を二束小脇に抱へ來りて、

若樣今毛入の臥褥が出來ますよ。

秀麿　どうも難有う、僕にさせて頂戴！

富松　私がやりますから宜う御座います。其より若樣は折角御暖りなさいまし。

と一束を擴げて地上に布き、一束は被覆の爲に殘し置く。

其で臥褥は宜し。サこれからは夕御飯だ、最う燒けたらふ。

と灰の中より堀り出し、

オー熟く焼けました、冷ない裡に召上りませ。ナニ私ですか、私は最う濟みました。如何です、未だよく出來ませんか?

秀麿　結構！　大層美味の！

富松　最う御濟みで御座いますなら、此處で御息眠遊ばせ。

秀麿は枯草の上に身を横たへ、富松は殘りの一束を披きて上に覆はせ、且着たる袢纏を脱ぎて着せながら、」夜は中々寒う御座いますから、汚穢くとも御掛けなさいまし。其でもし尚お寒い樣なら、起て火に御あたり遊はせ。私は火の滅へない樣に番守をして居ますから。

秀麿　富ちやん　呉々も堪忍してお呉れ！　僕は考へると泣き度なつて來る。

富松　何です、又其樣とを仰しやて。私は何とも思つては居ませんから、若樣も最う御忘れ遊ばせ。明朝は夙く起しますよ。

秀麿は眠り、富松は火を守り居る。

第九場　伯爵夫婦（居室）

夫人　漸と夜が明ました。昨夜は何と不幸な悲しい、嫌な晩でしたらふ！　私はとう〳〵些しも睡るとが出來ませんでした。秀坊はマ何うなりましたらふ?

伯爵　さう心配しなさるな、予が見て來ませう。が玄關に誰か訪問ふ樣子じやっ

此處に秀麿富松兩々入り來る。夫人は見るより走り寄りて秀麿を抱き上げ。

オーよく歸つてお呉れだ！　ドどうもせなんだのか?

左樣よく……

富松　ハイ夫人！　若樣は一夜の中に全然御變り遊ばしましたです。

伯爵　左樣！　其は眞實かへ?

秀麿　父樣御安心下さいまし。私は一時邊幅を修飾つ

た爲に、昨夜怖ろしい罰を受けまして、今は眞實衷心から改心しました。併し私を改心させて呉た無二の親友に、吾父は何ぞ禮物を取らせて下さいますか？

伯爵　好いとも〳〵、何なりとも望通り。

秀麿は直に強く富松の手を握り、

父様此人が即ち其恩人なので御座います。

伯爵　さうか、よし生涯御禮として年金をやらふ。

夫人　其では妾は昨夜の御禮に其を二倍にして上げましよふ。

富松　重ね〳〵恐れ多いお言葉計り、私は其のお言葉丈で十分、最う頂いたも同じとで御座います。

伯爵　なんの遠慮されては却つて困惑る。是非受けて貰ませう。時に朝御飯の用意が整備たさうじやから、皆食堂へ行かう。而して秀坊から昨夕の面白いお譚を聞きまよう。サァ御出で！

と皆食堂に向つて去る。中にも秀麿は富松と相擁して離れざりき。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

霞村生之を聞く、秀麿君は富松子を拉して今や英國ケムブリッヂ大學に在り、精勉研鑽、學業優に儕を絶え白人に敬畏せらるゝこと尠からずと。又聞く、伯爵は貴族院に於て、硬直清節、院の内外を擧げて倚重し。夫人は某慈善會の會頭となりて、無告の窮民の爲に熱き同情を表し居れりと。嗚呼亦多幸なる家室に非ずや。

（完）

扇影片々

古人が『白扇倒に懸る』と歌ひし秀抜なる不二の峯を畫くこと一百、具に其奇狀變態を究め、永く後人を嗟嘆せしめたりし大雅堂は、名は勤、姓は池野、秋平と稱し、京都の人にして名高き畫家なり。

『英才は忍耐なり』と西人もいへりし如く、大雅が彼

を此の名高き彼に成就したるも、決して偶然の事にはあらざりき。

彼は幼より穎悟にして學を好み又畫を能くし、頗る奥妙の域に達したりしが、其初は人の之を知るものなく、具に艱苦を嘗め、屢饑餓に迫りし事ありしも、彼は毫も爲に屈する所とてはなかりしなり。

嘗て漢畫を學べる時、彼は扇子數十本を畫きて、美濃尾張近江を周遊しつゝ自ら之を沽りき。然るに之を買ふものとては竟に一人もあらざりければ、彼は歸て溯田の橋頭に到り、其得もいはれぬ風景に暫時見とれてありしが忽ちに其扇を取て悉く之を溯水に投じける。扇影水に落ちて片々又片々たりき。

彼は叫べり『以て龍王を祭る』と。

彼が精勵はこれより大に加はりぬ。彼が名聲はこれより大に揚りぬ。彼は竟に一世の大畫家となれり。

繪畫

畫學の栞（三）

金仙

蘭や、竹や、梅や、菊や、世之を四君子と稱して畫學初歩の試筆に充つ。

竹と梅とは巳に畫法を示せり、今は蘭の運筆を説くべし。

春蘭一株。

（一）本の方より上に筆を運ぶ、尤も鋒にうねりをつくべし。

（二）同じく本の方より第一の葉にからめて。

（三）は上の方より折れて第一二葉の根に止む。

（四）は添へ葉。三つ四つ皆筆の勢にて下若くは上より



程よく書くべし。

（五）蘭の花。

（イ）圖の如く上下筆を合す。

（ロ）筆を上より。

（ハ）横に筆をつかひ、末にてはねる。

（ニ）は（ハ）のかへし筆にて下より勢よくかく。

（ホ）の點は香なり。春蘭の香は宜しく心字樣に寫すべし。

（ヘ）は花の莖。

（ト）蕾。

（六）は其完成したるものなり。墨色は、葉は濃き墨、添へ葉はやゝ淡く、花は淡、香は濃。

無聲詩話

（十二）

狩野氏の畫運は、愈〻永久に繼續せらるべくなりぬ。」元信の子宗信、直信。宗信法眼に叙し、祐雪と號し、一流の畫統を兒孫に垂たり。」直信は民部卿法眼、松榮と號し、七十五歳を以て文祿元年に終れり。子永德。永德名は重信源四郎と稱しぬ。人之を古永德と呼べり。彼は生れて桃山時代に逢ひ、太閤雄圖四海を呑むに當り、豪健なる其畫を以て寵遇せられ、筆を揮て恰も奔



蛇の勢ありき。此の英雄の世に、此の英雄の畫人あり。彼が其豪宕雄健を以て、一種の旗幟を押し立てたりしもの、蓋し偶然にあらざるなり。」世彼を狩野中興の祖と稱す。沒する年四十三、時に天正六年なり。

而して此頃又雪舟の風を學べる田村雪村ありき。名は周繼、如圭とも鶴稱老翁ともいひ、平藏と俗稱したり。奥の磐城田村郡の人、常陸の那珂郡に住みぬ。嘗て家貧しく、自ら團扇を作りて、之に草畫を畫き、以て

世を過ごしきと傳ふ。
其詣、淡雅にして逸態あり。山水を所長とし、花鳥人物をも能くせり。

家政

家内の幼稚園

程隔たりたる僻村に住み給ふ人々は、殊更なれども、東京の市中にても、幼稚園の遠きに困り給ふ人々は、少なからず。殊に寒中、暑中等は、小兒の外出には不便なれば、是等の人々はわざに遠き路を小供を引きて幼稚園に通ひ給はずとも、家の内にてりつぱなる幼稚園を作り得るなり。



幼稚園の目的　は小供に物を教ふるにあらで、小供を遊ばしむるにありとは、誰も口にする處なるが、實に幼稚園は利益ある遊によりて小供に物事を覺へしむるにあり。殊と更ら三四年の小供のいたづら盛りなるを捕へ、靜かに坐すべし、是れ々々を覺ゆべしなど、早學をなさしむるは、心なき業なり。さなきだに三四

歳の小供は、非常に神經の強きものにして、少しく氣にさわる事ある時は、邊りの人々を打ちたゝき、或は弄物をこわすなど、しきりに荒れ廻りて、怒るものなれば、此の時分より捕へて、物を敎ふるが如きとあらば、小兒身躰發達の理法にもとる事、猶ほ進まんとする車を俄かに止めて覆すに同じければ、家にて子供を育てんと欲し給ふ母親の、殊に注意すべき處なり。

家内幼稚園の仕方　幼稚園はフローベルと云ふ人の始めし處にして、同氏の方法によりて小供を遊ばしむる時は、小供は面白く遊ぶ暇に、知らず〳〵智慧を増し、智識を開くべし。小供が手に物を握り得る初めより、少年と呼ばるゝ十三四の年に至る迄も、喜びて弄ぶものは球なり。フローベル氏はこの球を以て幼稚園の最初の小供に遊び道具として與へしは、故ある業なり。さてその球は赤、黄、青、橙、緑、紫の六ツの色糸を以て、六種の球を作り、之に糸を付けて水車等の歌を歌ひながら、之を振り廻し、或は上に擲げ、或は壁に擲ちて遊ぶ内に、母はその色に赤黄青の正色と、橙・緑・紫の間色のある事、或は右の手と、左の手、或は球の形、もしくは球を擲ちてその彈力ある事等を敎ふる時は、さなきだに物事を覺へんと思ひて、何くれとなく母に問ひつゝ日を送る小供等は、それ等の事を喜びて習ふべし。

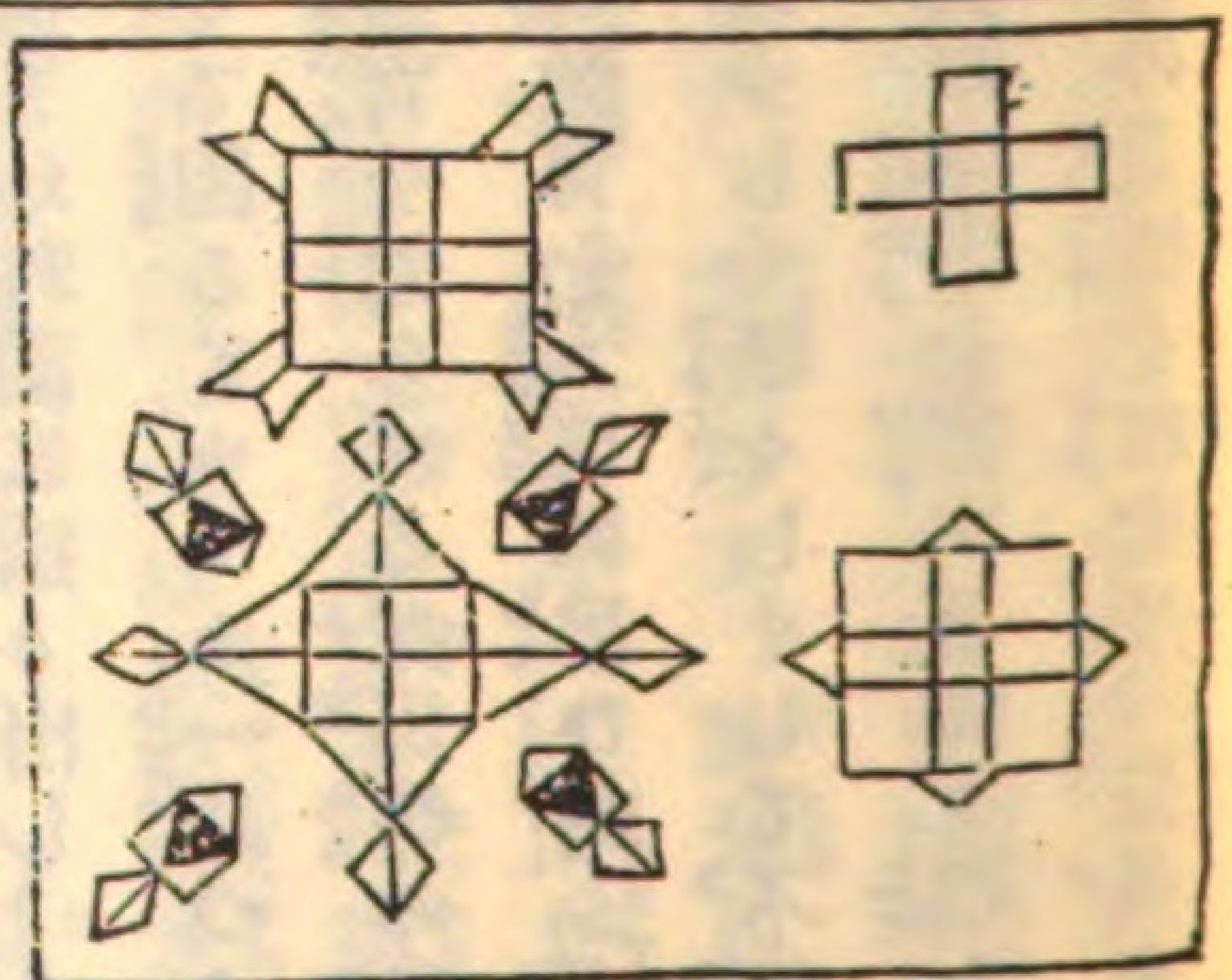
特にその球をひろひて、雞が餌を取る處なりとか、半鐘を鳴らす眞似とか、若しくは風車の廻る處などにかたらへて遊ばしむれば、想像に富める子供は、口の閉づる間なく喜び笑ひて遊ぶべし。

第二　球に付きての凡ての事を覺へたれば、次ぎは幼稚園の弄具屋にて、木像の圓躰、方躰、圓柱躰の三種を求め、球と比べてその異ひし處を指し、球は丸けれども、方形は四方なり。圓躰は球に似たれども、木にて作りたれば堅く、圓柱躰は丸き處丈け球に似て、

上下の平たき處は方躰に似たりなど、一々解剖して說き聞かしむる時は、小供は之を積みて石碑の如き形などして遊ぶ間も、種々なる事を考へ覺ゆべし。これ等の物品に付きての說明の仕方等を一々記さんには限りある紙上の盡くすべきにあらざれば、終りにその說明をなせる種々なる書物の名を掲げたれば、悉しく知らんと思ひ給ふ人々は付きて見給へ。

次ぎは八片の木を合せて先きの如き方躰を作りたるものを與へて、或は椅子の形、家の形、鳥居の形、もしくは橋、學校等を組み立てしめ、作りたる物の形に付きて、簡單なる說明を爲さば、大に智力を發達せしめ智識を增すべし。

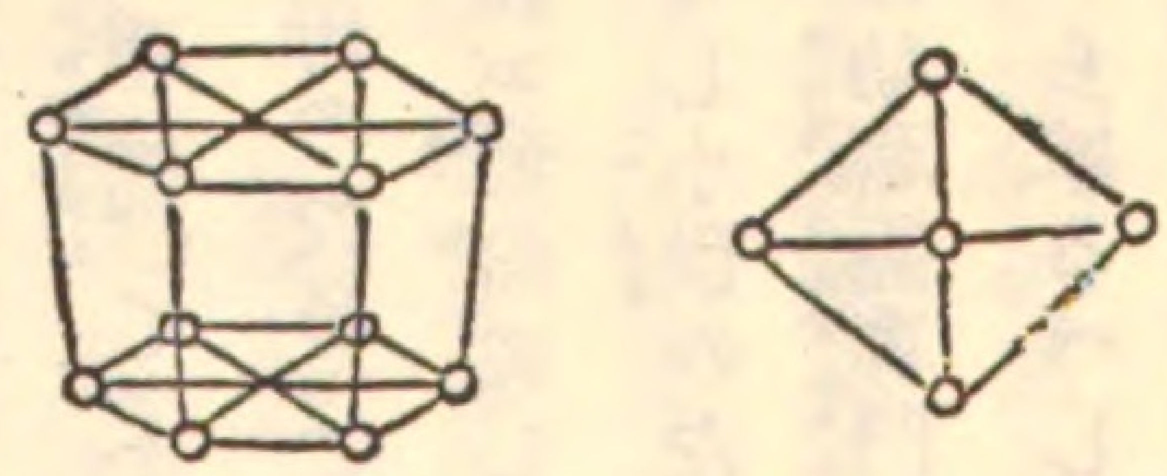
次ぎは八個の長方躰、次ぎは正方躰を斜めに斷りしもの次ぎは、正三角、次ぎは鋭三角、鈍三角等を順次に與へて、種々なる形を作らしむべし。固より一時に多くの事を敎へて、小さき腦を亂だすが如きとあらば、反て敎ふるは敎へざるに劣れば、一つを能く覺へて飽きたる時、新らしきことを敎ふべし。



組立てものは種々あれども、初めは簡短なる十字形より、進歩して漸々精密ならしむべし。

一図

二図



次きは摺附木の棒の先を去、もしくはそれ位の者を以て、家の形、窓の形、箱の形等を畫かしむ。これは小供の最も喜こぶ處なり。尚ほ色紙に縫ひ取りの稽古をなさしめ、或は紙を折りて鶴、糸巻、花等を作らしめ、或は石盤に圖畫

を書かしめ、粘土を以て彫刻を敎ふる等、様々の事あれども、小供が最も喜ぶ處の遊びは、豆細工なり。之れは豌豆、大豆の如き豆を、十二時間計り水にひたしをき、三時間計り引き上げて乾燥せしものを、針金、もしくは竹を細くさきたるものに刺し通して、種々なる形をなす。例へば一圖の如き糸卷、二圖の如き籠等を作るにあり。凡そ此等の翫具は徒らにはあらずして、皆な小兒の心の角々を磨きとがらす様に出來居るものなるを忘るべからず。

幼稚園の事に關しては日本にも大分著述顯はれ、フローベル氏の原書を參考せし幼稚園保育術など云ふ書物等もあれども、悉しく學ばんと思ひ給ふ人々は、原書に付きてしらべ給ふに越したる事はなし。英語原書には「マニウルチフカルスセニック」とて有益なる注意を與へしもの一ドル二十五錢にて求め得べく、フローベル氏の原述を譯せし「敎育論」と題するもの、或は「幼稚園の手導」、等は何れも有用なる書物なるが其他にも「國民幼稚園」とてホロック氏の著述せしもの（代價七十五錢）母のためなる「實際上の英國幼稚園の手導」（二ドル十錢）「如何にして目と耳とを導くべき」（六十錢）及び長ぜし小供のためには「此の次ぎは何」と題するもの等は幼稚園專門の人々のためには、殊に裨益する處少なからざるべし。

時に不人情なる父母たちは、寒天に小供のために胃をも、腸をも害すべき固くして冷たき辨當を持たしめ、遠き幼稚園に送り出し、小供が宅に居りては、八釜しくて困るとホット一息つくことあり。これ誠に敎育も養育も知らざる父母等の業ならずや、いやしくも小供の敎育を大切に思ひ給ふ人々は、たとひ家内のためには少しく騒々しくして不都合なるにせよ、大切なる小兒の健康を害する如き事を爲さしむるよりは、むしろその月謝を投じて、器具を求め、自宅幼稚園を開くと

そよけれ。此の頃華族の夫人の方々が、幼稚園を開き給ふと聞きければ、参考にまでかくなん。

老人と小兒

過ぎたるは猶ほ及ばざるが如してふ諺にもれず、老人と小供とは、大と小との差別こそあれ、老人は過ぎて弱はく、小供は及はずして弱はし。世の中の病人を除きては、老人と小供とは最もいたわるべきものなり。殊に餘命少なき老人には、一しほ心してそれ〴〵の手當をば忘るべからず

人世の六世期

動物學者は、人の一生を稚兒、幼年、少年、成年、壯年、及び老年の六世期に分ち、生れ出てより、齒の揃ふ迄の一二年間を稚兒と云ひ、それより永久齒のはへ出つる五六年間を幼年と云ひ、十二三才より十五六才に至る迄の、小供盛りを、少年と云ひ、女子の二十才男子の二十五才迄を成年と云ひ、それより、所謂若からず、老ならず、時候にて云へば春、一日にて云へは日中、山にて云へば頂上、花にて云へば滿開と云ふべき人世に二度と無き結搆の時を壯年と云ふ、大切の壯年之を過ぐれば秋風晩景の老年時代、墓所の羅と手を繋ぎて待てり。この六時代はたゞに、その働の上より異なるのみならず、肝心なる身躰の有様の變化するによりて知らるゝなり。

歷史上の統計に照らすに、老病は婦人の五十三才、男子の六十才の頃より初まるが、或はリウマチ、或は腰の傷、何くれとなく身を攻め來りて、生命の源を斷ち、泉の源を食ひ盡くす迄は止まざるなり。

其時を如何に爲すべき

さて一度老病に見込まれたれば、他に逃るべき名法もなけれど、只だ一すじの綱は養生にあり。齒の拔けた

る老人が、第一に撰むべきは、柔らかくして滋養ある食物を食し、第二は、清き空氣を呼吸し、第三は適宜の運動をなし、第四に身躰を温かく保護し、第五清潔を保もち、第六樂しみを與へ、第七相當の服藥をなさしめ、第八安眠をなさしむべし。



第一、食物清潔

老人長壽の藥とも云ふべきは、胃を壯健に爲すにあり、されば朝は牛乳の如き消化好きものを重もなる食物とし、晝食、夕食の時間を早くし、夕食には輕ろき食物を多過ぎざる樣に食して早く安眠すべし。老人は小供と同じく、成る的能く休むを可とす、元より喫煙飮酒の老躰にあしきは云ふ迄もなけれ共、老人に忘れ勝ちなるは清潔と云ふ事なり。これは最も大切なる事にして、毎日熱つ過ぎざる湯に入浴して、後を温かく保護すべし。

第二、慰み

慰は、幼年中年老人をおしなべて、缺くべからざるものなりとは雖、老年程、その必要なるはなし、他の人々は事業そのものを樂しみとし、勉强そのものも樂しみとはすれども、老人にはその樂しみなければ、若し讀書を好む人は、讀むべき書を供し、散步を好む人は携へて散步し、その出來ざる人は談を以て慰むべし、老人は最もその若き時分の成功談をなすを喜ぶものなれば、くだらぬ談も忍耐して之を聞かば、三年の生命五年は長らふべし。

老人の藥には何を與ふべき

老人には、アルカリ性のものを忌めば、温かくして、興奮する性質のものを藥として供するを可とす。通じは毎日滯らざる樣に注意し、もし滯る如きとあらば、輕瀉劑を供するか、若しくは灌腸をなすもよけれども、はげしき下劑は決して用ゆべからず。小水の通じの惡しき事は、何れの老人も困る處なるが、急ぎて不充分の通じに止まるは、害あれば、事務の一と思ひて、靜かに全たく通ずるを待つべし。

家庭敎育につきて

やぎ生

家庭に於ける小兒の敎育は大切にして、つまらぬ事など敎へたらむには、小さき腦に記憶せられ、容易に消ゆるものにあらず。斯く申すやぎ生なども恥かしながら、十一二歳までは、時計の秒音は中にて僧の叩くこと、吾れは簞笥の中より生れ出でたること、大入道は常に竹藪に居るなど、云はれたる儘それを信じ、偶眞正のことを聞くに及で、却てこれを訝りたる程なり。小兒なれば覺ゆることもなからむとて、一時の戯につまらぬ事を語り聞かするは、大なる間違なり。

先日知人の家を訪ひしとき、今年八歳なる兒童が、學校の課程を終へて歸りしにやあらむ、手のさき顔のあたりには黒點を染め、腰には竹刀を挿み、繪双紙にて懷中を膨らし、寒さを訴へながら父の傍に來り、主客の對座せる中間の火鉢にて、暖を貪り居りしが、父に向ひ、御父樣此間幽靈が出ると云つたが、今日學校の先生に聞たら、幽靈といふものはないと云つたよ、父はこれを聞き笑て答を爲さず。兒は又懷中より賤ケ岳七本鎗の繪双紙を取出して、父に問ふ、此中で何人が一ばん强ひ、それは加藤淸正サ。それでは太閤とど

つちが强ひ？、組打をさせたら加藤の方が强かろふよ。困たな〳〵アー楠〳〵、正成とどつちが强ひ？、正成は忠臣だが組打では加藤に負るサ。八幡八郎は、矢つ張り負るだろふ。兒はエートと考へながら左右を顧み、仁王樣ではどうだひ、父は客を見て破顏一笑、仁王樣は人間ではなひよ、化物だよ。人間でなひ、化物？、化物といふのは何だひ、父は忍びかねて、何でもいゝよ、うるさひ、遊びにをひで。兒はこれに逆はず座を起ち父に向ひて、何しろ加藤が一ばん强くつて負けなひねと確めたり、父は苦り切て、左樣〳〵、遊んでをひで。

余が〇さん待玉へといふを耳にもかけず、ハヤ何れかへ出で去りたり。暫くして門外遙に兒の聲を聞く『己れは加藤淸正だ、一ばん强ひぞ、仁王樣は化物だ』父の言は敎師の言と齟齬す、兒はいづれを信なりとして可ならむや。又此問答の是非は、余が言を待たずして知らるゝならむ、されど如此問答にて兒の腦中に印せられたることは、容易に失せざるものなれば、小兒を持たれし父母は、家庭の敎育に注意あらまほし。

小供の食物

小供の食物は大人と異ひ、固きものと餘り脂の强きもの、甘過ぐるもの、辛すぎるものは、殊に注意して避くべし。今その適當の分量を記さんに、麥の四分一ボンドを一合足らずの水にて一二時間煑、出來上りたる時、牛乳五勺と、糖蜜もしくは砂糖を加へて之を朝食とすべし。晝食は之に靑物及びシャが芋二ポンドと、四分の一ポンドの牛もしくは羊肉とを與ふべし、鹽家は不消化なれば成べく與へざるを可しとすれども、もし牛肉のなき時は鹽家二オンスを煮て温き内に與ふべし。

勿論以上にかゝげたる事は凡べて此規則にかゝわらず此位の割合を示めすものと心得べし、

健康を保つの道

人の躰は恰も時計の器械の如しと、昔しの人は云ひたりしが、余は云わんとす、時計よりも尚ほ精細にして、蒸氣機關より尚ほ力のある驚くべきものなりと。躰中の諸器械その所を得、分に隨ひて程能く働く時は、所謂健康躰なるが、心臟にても、胃にても、肺にても、其他筋、骨、神系、皮膚何れにても規則に違ふ時は、病氣となる。

健康を保つ、必要はたゞに身躰の快活と、安慰を得るためのみならず、身躰の健强なるものは、其心も亦た壯快なり。されば身躰を强壯になすは、人類の職分なれば、我等は如何なる法方によりても、身躰の健康を保つべきなり。誰も健康を保たんと思ふは一法なるを、世に病人の多く出來るは、一は天命もあるべけれども、亦た人類の不注意によらざるはあらず。人の力に能ふ處は、即ち食物、清潔、衣服運動睡眠を注意するにあり。

食物や、運動や、清潔を注意せよと云ふ事は、めづらしくもなき談にして、又た始りしかと思ふ様なれども又たの事をさへ實行出來さるが故に、實行出來る點はかく重ねて書くの必要あり。重ねて讀の必要ある也。」米を籠に入れて水を濺がんに、水は籠に止まらずと雖も、一度濺げば一度だけ美しくなり、二度濺げば二度丈け美しくなり、遂に全くその糠の去るが如く、人も好き敎訓を聞く度毎に少しづゝその傾となりて、遂には之を全く實行するに至れば、知りたる事なればとて捨つべきものならず。

食物の効用

人の躰の中にある血液は、種々なる分子より成り立ち

て、或は蔬菜の分子もあり、或は肉類の分子もあれば、食物は成る丈け多くの種類を混じて食すべし。英語の食物と云ふ語は、元と滋養物と云ふ言より來りしと云へるが、固きものにもあれ、柔らかきものにもあれ、肉食にせよ、蔬菜にせよ、その性質の好きものと、その適當のものを食する時は、健康は去らざるなり。何を食し、何を飲み、而して何を避くべきかと云ふ事は、久しく學者を苦しめし問題にして、又た度々論じ合ひたる問題なるが、折角に理學上より身躰のためになる食物の種類を定むるも、人々の嗜好に適せざる時は空しく捨てらるゝは是非なけれ。

食物が滋養物と云ふ以上は、人は身のためになる食物、即ち骨にも、筋にも、血にも、凡てのものになる食物を食し、呼吸によりて吐き出し、血液の巡環によりて、失ない、身躰の生長に付けて、費やす處の部分を補ふ事を專一とせざるべからず。

食物配當の分量

人の躰は炭酸水窒の四元素より成るが故に、食物はその四種を含みたるものを取るべし。十人十色にて、人は一定せざれども、健康の躰にて通例の運動を為す人が一日に費やす處の人躰の費用を補はんには、米五ポンドシヤガ芋四ポンドに小麥粉一ポンド半、燕麥或は、パン等二ポンド牛、羊肉の如き脂肪質のものを一ポンドと四分の一を要するを通常とす。蔬菜と牛のスープは、人躰に最も大切なるアルカリ其他の物を含むが故に、怠らずして食用すべし。若し食を好まざる人あらば、その更りとして他の植物を食すべし。即ちその人一日の量はパン一ポンドシヤガ芋二ポンド、蕪、ほうれんそうの如き青物を一ポンド、豌豆大豆の如き豆類を四オンス、蔬菜のナンプラを四オンスの割合にて食すべし。食事は四五時間殊に一度づゝ用ひて、一日三度の食事をなすを最も良しとすれども、病人にして衰弱

せるものは、氣を失ふ等のとあるを以て、スープ、牛乳、粥等を少しづゝ度々に與ふるもよしとす。

食物調理の注意と寒中の心得

食物は如何に美味なりとて、躰のためにならざるもあり、不美にして躰のためになるもあるが、元來滋養に富める食物を、味の美を作らんとして煮たり、炙りたり、もしくは鹽漬となすと等滋養のなきものとなるのみならず、反て身躰の不爲となることあり。例へば湯出ぬき卵子とて、卵子を好く／＼湯出、固まりたるもの丶如きは、その一例なり。又た假令、煮、炙るとによりて害にならざるも、少なくとも鹽質、或は鑛物質等の最も人躰に必要なるものを失なふは少なからざるとなり。是等のものを補わんとするには、牛乳、熟したる菓物、新鮮なる水、及び少量の食鹽等を用ゆるを最もよしとす。又た寒中には温氣を取らんため、暑きものを用ゆるの癖は、何人にてもあり易き事なれども度外に暑くして吹きながら食するが如き者は、大に胃部を害し咽を害し。かの『かく』とて食物少しも咽を下らず、生きながら日干に遇ふ恐ろしき病は、暑き食物のための、咽を燒く事度重なりて、遂に咽の通路を失なへるものなり、又矢鱈に茶コーヒー、紅茶等の興奮藥によりて、温を取るも、悪ければ、是れは大に注意すべき事なり。

清潔

食物に次ぎて大切なる事は、清潔なり。やつし家は一日に三四度も顔を洗い、洗濯屋は終日その手を水中に浸せども、是れは清潔とは云へず。清潔とは即ち全身を浴して垢を止めざるにあり。人の皮膚には二千萬若しくは三千萬の小さき孔ありて、血液巡環の際、躰中に不用のものを生ずる時は、その孔より外に吐き捨て、又た運動等にて躰中に餘りの暑を得し時は、その

孔より外氣の平均を取る好き仕掛に出來たり。又た皮には脂肪ありて、常に躰の滿面へ配布せるが、もし不潔にして、その孔を塞ぐ時は氣は內にこもりて、大病の元を起す。寒中は殊にぶしようにて、躰を洗はざるものなれば殊とに注意すべし。

衣服の事

皮膚に適當の働を爲さしめんとするには、洗ふのみならで、又た相當に保護すべし。もし躰を温かく護らざる時は、躰中の燃料を早く燃し盡くすが故に、餘計の食物を要するわけとなる。故に温かき衣服は、食物を儉約せしむると同一理なり。温き衣服とは毛、綿等の如き、不導躰のものにして、白きもの、目のあらきものは良導躰なるが故に寒むし。洋服の袖の寒むきは餘りにきつちりとしまり過ぎたるが故に、間に不導躰なる空氣の入り場なきが故なり。其他の衣服の注意を云へば、衣服を確く衣るに由りて血液の巡環を止めざる事、餘り薄きに過ぎず、餘り厚きに過ぎざる事、帶の邊をきびしくしめざる事を注意すべし。男子の頭には禿げの多きは、帽子の確きに原因し、婦人の頭の禿ぐるは髮の結び方等によると云へば、これも養生の點よりしてつゝしむ事なり

婦女職業案內

再び高等なる內職に就て

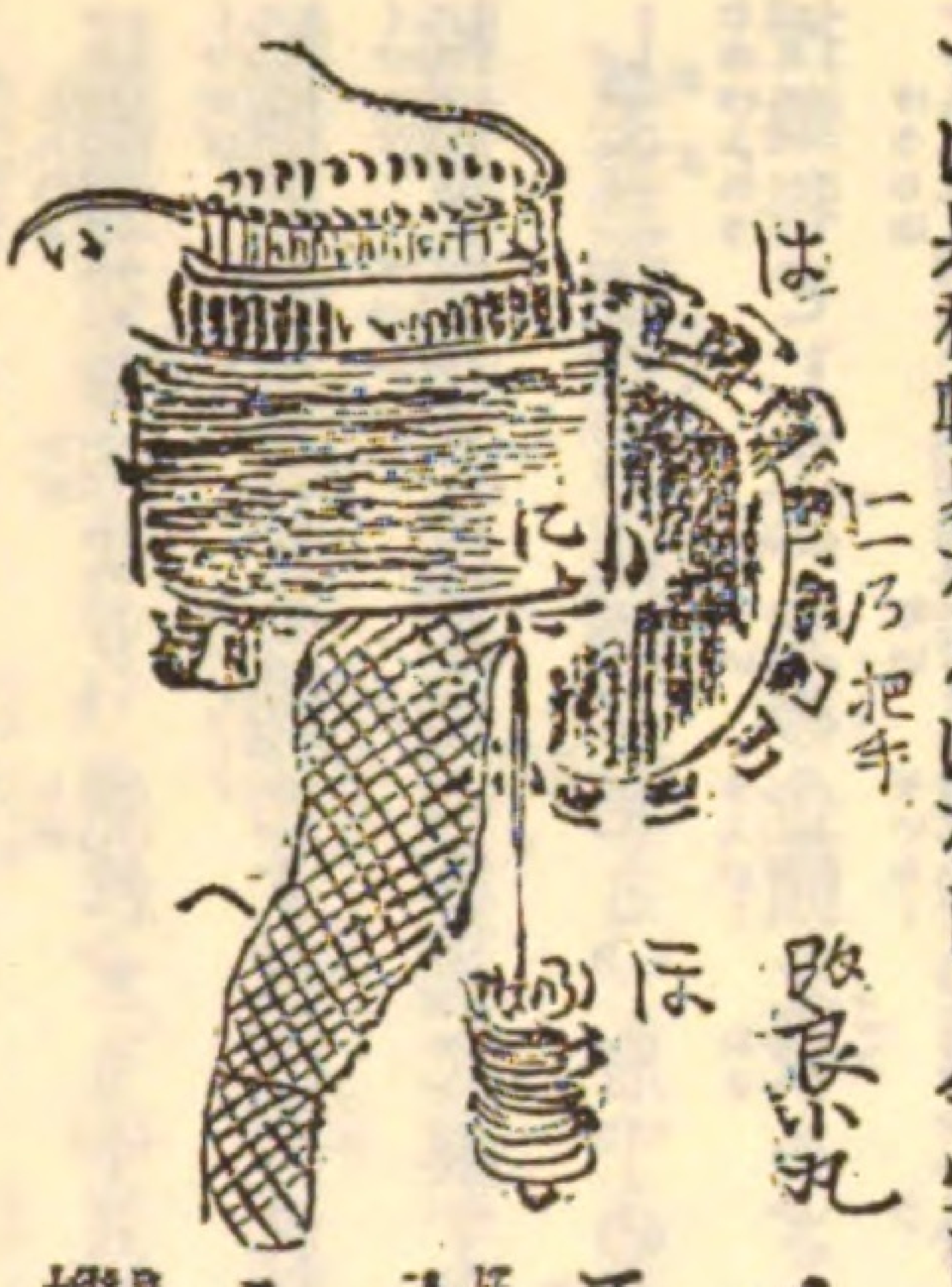
我社は昨年十一月廿五日本紙第十八號紙上に於て婦女職業案內の內に高等なる內職と題して世の姉妹に、少しく資產あり餘裕ある一家の妻女又は兒女に好適する內職は「メリヤス」編に限るとし其製作の方法及道筋を一通り記し置きたるが、果然職業に志ある姉妹より續々此事に關して問合らるれば我社は再び其詳細を述べて飽までこれを勸めんと欲する也。

「メリヤス」編の職業とても其種類數多あればなか〳〵一朝一夕に習ひ覺ゆることむづかし、各製造場にては小僧を雇ふにも五個年乃至七個年の年季を入れさするを見て其一斑を知るべし、併しそれは上下シャツより帽子、肩掛、手甲、靴襪、手袋其他種々なる物品を製作すれども夫相應に機械を要するが故に素人の家にては困難なる業なり、然れども十八號にも記載する通り靴襪と手甲位を内職にすれば夫にて十分なり、而して靴襪と手甲の出來得べき迄に要する修業の時間は長くして二個月あれば事足る、府下の製造場の中には別に授業料として一定の金額を收めざるも必らず親切丁寧に敎授し二個月内に製作の出來得るやう敎る所あり、(有志の姉妹は來社又は書面にて問合せあらば其製造場を示すを厭はざるべし)又製造場に限らず此道に巧者あらば其人に就きて學ぶも同じ事なり、併し製造場は常に機械を据付け日々運轉するゆゑ稽古する者は製造場に就く方實地を見聞して、旁便宜なり。

二個月位にして修練を終らばこれより直ぐに自身獨手にて實地の内職に取掛る、さて其内職の製作に要する機械は曩に報道し置きたる舶來品にては瑞西製を第一とすれども當時は爲替相場二割方も騰貴せり、和製にて『改良小丸』と稱するものあり、これは芝愛宕町三丁目二番地國友「メリヤス」機械製造場にて三十五圓の價を拂へば慥に堅牢なる機械を購ひ得らる、勿論府下佐竹原其他の製造場にて三十五圓以下にて賣捌けども機械の善良なるは國友に及ばざれば三十五圓の機械を求め置かば永久の間使用せらる、此外に大中小の機械用針を要す(大は毛絲に、中は木綿に、小は絹絲又は「ガス」絲の如き細物に用ゆ)、而して其代價は爲替相場の變動にて多少の相違は生したれども舶來一本二錢内外和製は一本一錢五六厘其他には機械を要せざれども機械を安置する卓子と製作者の體を安んずる椅子の必須

なるは申す迄もなし。

『改良小丸』は隨分器用に出來たる機械にして之を運轉するには別に大なる力を要するに及ばず、婦女子小兒と雖も容易に運轉し得べきものなれば、機械仕事としては是程輕易なるはなし、今少しく上圖の說明を爲すべし、(い)は機針にして機車の廻る事に出入自在、絲を筒形に編ものにして大切なる機具なり、此機械の釜は取脱自由にして絲の大中小に從ひ針とともに交代せしむると容易なり、故に此釜と針の大中小により交代して絹製又は木綿製又は毛絲製の製作品を得らる、(ろ)は把手、これを握りて一轉すれば上なる機械はチヤキ〳〵と刻む(は)は則ち(ろ)により廻轉せらるゝ機車なり、(に)は機體にして總の機具を保持するもの、



(ほ)は分銅なり、これは重量を以て製作品を下方に引張る爲に用ゆるもの、若しこれなくば出來しつゝある「メリヤス」編物の弛みて機械の運轉自在ならず、故にかゝる分銅を附して重量を保たしむ(へ)は則ち製作しつゝ且つ出來しつゝある靴襪の製作品と知るべし、靴襪は一足々々宛別々に製作するにあらず、編みながら一足の結尾に至れば糸にてまるし置き一ダースを編み終りて後一足々々に裁ち去り爪先と口元をかゞる、口織には別に横機械なるものあり、其圖は玆には畧すれども此機械に依りて織りなさるゝ畝織を附して始めて完全なる靴襪を製し得べけれども、自家用には畝織を口元につけざるも小丸にて編みたるものを、首尾をかゞりたるまゝにて用ゐらる、併し賣品とするには是非畝織を附せざれば躰裁宜しからざれども、自家に此機械を供ふるに及ばず、それはそれにて內職にするものあれば、他より取りても別段高價なるものにあらず、

又編尾の開口も一「ダース」三錢位にて内職にするものの多ければ自家にて、行るも人に賴みても、差したる事あることなし。

十八號にも記したるが如く、習練を終れば通常の婦人にして、一日毛絲靴襪一「ダース」を製する事確なものにして、其の熟練なるに至りては一日二「ダース」は製作し得らるべし。偖て其賣捌方は最寄の「メリヤス」問屋又は小賣店又は西洋小間物店等に相談せば、必らず喜びて之を迎ふべし、何となれば素人の製作は多少粗笨の嫌あるにせよ、商賣人の如く此處其處に手間を抜かして買手を瞞着するが如きことあらざればなり、而して毛絲の製作品(靴襪)を目下の相場にて卸す時は、原料其他の雜費を扣除し、一「ダース」四十錢内外は利益あるべしとなり、これは確實なる製造所に問合せたるものなれば、處と場所により相場に少しの差違はあるにせよ、大したる事はなし、何樣曩號にも報じたる如く利益にもなり且つ運動にもなり猶ほ體裁も惡しからざる内職なれば、閑暇と資本ある人は實行して見るも面白き業なり。

手藝案内

「ヅボン」の裁縫

曩に「ミシン」(縫機械)の事を記したれば、これより折々其使用を記さん、「ミシン」の使用は數多あり、其簡易なるものは襯衣を縫ふべし、洋袴下も縫ふべし、帽子細工には帽子を縫ふべし、其他いろ／＼なるものなれば「ミシン」所持の人は其使用を種々に試み玉へ、洋服の裁縫に至りては少しく熟練を要し、通常の洋服裁縫店にて小僧を雇ふに、少くとも五個年の年季を入れさせ、其間は單に縫方のみ敎へ且つ熟練せしめ、然る後裁方を半年間敎ふるなり、何樣機械細工のものな

れば一寸六ヶ敷やうでも一通り手に入れば日本の針仕事よりも簡易なる所尠からず、裁縫店にては始めは「ヅボン」の縫方を教ふれば、茲にも其裁方を併せて縫方をも栞せん。

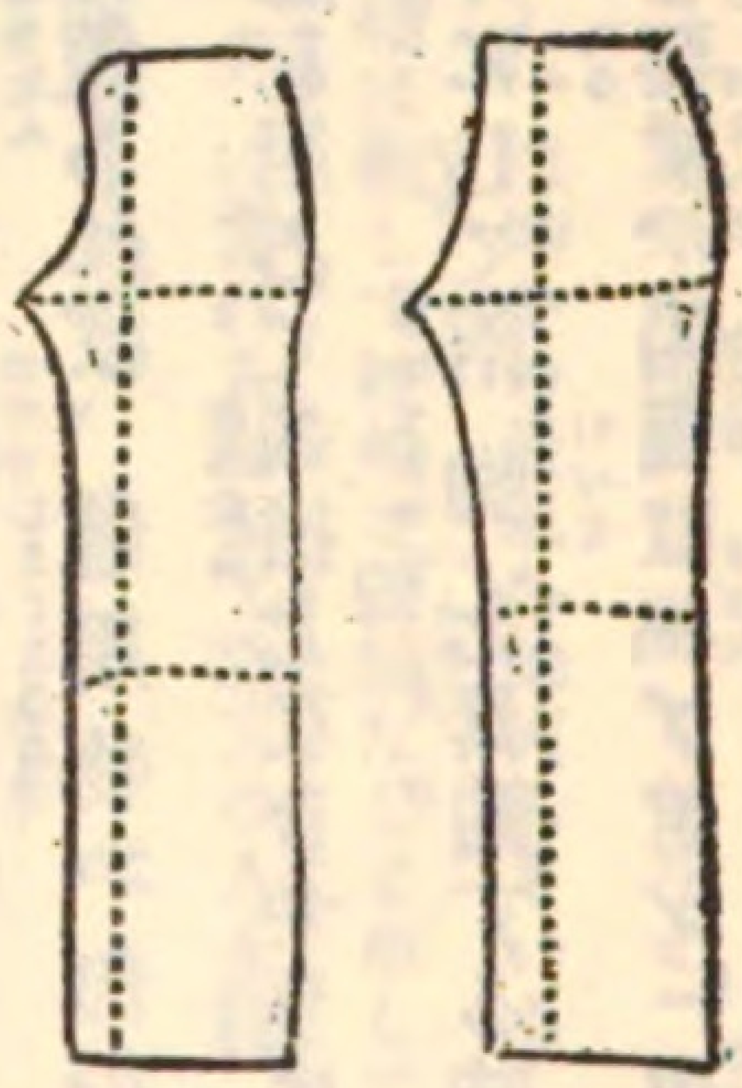
全躰「ヅボン」は躰の下半部にあるものなれば此服の善悪によりて大に全躰の格好を左右するものなれば能々心して裁縫すべし、勿論時の流行により、其丈の長短又は幅の廣狹等あれども、それは其時々の流行に從ふも從はぬも嗜好に任せて宜し、さて裁切の寸法を記す前に一寸尺度の事を一言せねばならぬ、和服の裁縫用には直なる鯨尺を用ゆれども洋服裁縫には原語にて「インチ、テープ」(Inch tape)と稱し我國にて俗に「インチ」尺と稱する革又は木綿の上に「インチ」目を盛りたる尺なり、蝸牛の殼の如き中にありて摘み出せば尺のある限り延長し、指を放てば殼の内に藏り伸縮自由なるものなり、これは仕立屋のみならず醫家にも之を用ゐ病人の胸や腹の度を測ることあり、洋服を裁縫するには此尺度なくては、身躰の彎曲なる箇所を量り其人に恰好したる衣服を製する事能はず、左れば此「インチ、テープ」は仕立屋に取りて實に大切大要なる道具なり、「此外に「スクエール」(Square)と稱する木板にて製したる曲尺あれども、これは裁切の際に使用するのみなり、さて是より「インチ」尺を以て寸法を定むる方法を圖に添えて示さん。

甲圖の(い)は脇丈にして此度は臀の凹みたる所より足の平まで測る寸法なり(ろ)は總丈又は前丈にして此度は「ズボン」の前を測る寸法なれば臍の邊よりずつと眞直に足の平まで測るなり(は)は脛縫又は胯下と稱し、「ヅボン」の中の縫目を測るものなれば、胯の處より足の平まで測る、而して「ヅボン」の躰に合と合はざるは大概此丈の正不正に依て僅少の差を生ずべければ、能々注意して寸法を定むべし、但し通常の仕方を以て胯

下を測る時は、之を嫌悪するの人なきにあらず、故に他法を用ゆべし、其法は先づ定木を胯の處に當て其以



甲



乙



丙

下を測りて胯下の丈を知り次に定木以上胯の所まで測量し以上下の丈が總丈に符合せば胯下の寸法の正しきものと知るべし(に)は胴、此度は短衣の下の處を測る、(ほ)臀、此度は臀の最高部の周圍を測る、(へ)は股、これは双の太股を量る、而して善備體の人は、臀の度の三分の二あるを通例とせり、今參考の爲に其比例を記せば、臀の十二「インチ」は股の八「インチ」、十五「インチ」は十「インチ」、十八「インチ」は十二「インチ」廿一「インチ」は十四「インチ」、十三「インチ」は九「インチ」、十六「インチ」半は十一「インチ」、十九「インチ」半は十三「インチ」、廿二「インチ」半は十五「インチ」なり、凡て此比例に據るべし、(と)は膝なれど始より寸法を定むるに及ばす後から能き格好に見計ひて定めて差支なし、(ち)は口、これは「ヅボン」の口の周圍を測るなり、此口は人々によりて太きと細きを好めば其向〳〵に從ひて寸法を定めて可なり、細形を好めば、其人の脚の周圍と甲の形を紐にて精密に度を測り定め、口の太く緩なるを望まば、股の度を嚴しく測り其度を以て口の大巾とすべし、而して通常善備躰の寸法と稱するは脇丈四十二「インチ」總丈四十二「インチ」、胯下三十二「インチ」、胴十四「インチ」半、臀十九「インチ」半、股十二「インチ」又は十三「インチ」膝八「イ

ンチ」半、口九「インチ」なれども、なか〳〵百人が百の紙上に栞する事あらん。人此寸法に合ふものにあらず、故に先づ此寸法を標準として人々の寸法を定むべし、和服ならば五分や一寸間違たりとて着用したる上にて差まで目立ちて躰裁悪しからず又兄の衣服を弟が着たりとて可笑しきまでに見苦からされども、洋服はさうはいかず五分乃至一寸長短あれば、借用物か何かに見らるゝなれば、能々意を用ゐて裁損じなきやうにすべし、乙圖は則ち其裁方にして兩脚を具備する時は、斯くの如きもの四枚を要す、丙圖は「ヅボン」の口の格好を示したるものなり。

素より實際に裁縫せんとならば、測りし寸法に半「インチ」位の縫代を置きて「ミシン」を運ふべし、始より實際に取掛らば可惜能き布帛を裁損じ等の怪我あるも量られざれば、稽古の內は反古紙の如きものを繋ぎ、これに寸法を定めて裁縫せらるべし、其他の事は他日

社交一斑

春夢

流行の栞

目下の最流行衣

昨今梅のチラホラ咲き始むるに杖を曳き、梅屋敷や、公園等にて多くの人の衣服を見るに、目下の最流行衣は左の如し。

男女書生羽織—大島縞及紋お召第一にして次は市樂の淡色が風通織に見たり、其次澤山見受たるは、米澤琉球の飛白にして本場物に髣髴たる所より上中等社會に於て餘程愛顧を受くるやうに、厚綿を入れポツ〳〵梅見などに出懸くる人多し、其次は瓦斯糸結城の類にして、鶴の毛織を着せる男も女も彿々見受けらる、これは直段の平民的なるが故に行はるゝものと知るべし、此外に琉球紬に僞せたる絣の双子を着するは一寸氣の利たる書生連が其處等の連中と知るべし。

男羽織——紋附以外は市樂織第一流行之に次ぐものは絹糸織と繋絲は織にして總じて地合の地味なるを尙ぶ一寸見た處でも紺地に鼠の大名、萬筋に限らるゝやうなり、商人的には例の結城紬第一にして他は銘仙と節絲織位なり。

女羽織――婦人の羽織は玆に言ふまでもなく紋にして、昨今の流行を見るに黒七分小紋三分の割合にして紋は三つ紋七分五つ紋三分の勢なるが如し、而して縞物に至りては餘り多く見受ざるも市樂、山絲織の華美なる色を着るもの多し。

衣服――男女の衣服共に前號に記載せるものと其流行異動なければ玆には省きぬ。

呉服及木綿物の景氣――相場は昨年の當時と敢て差したる異動なきが如く、木綿物は五分方も上直にも運びたらんか但し其原因は原料の紡績糸及瓦斯糸の騰貴に基くなりと、機屋の賃錢に至りては別に變りし事なし、扨昨今の景氣を如何にといふに、呉服物は較宜しき方なるも、木綿物は槪して昨年と變動なしと申して差支なし、去りながら目下は舊正月に當れるをもて地方の人士陸續上京するにつき一體に景氣宜しき方なりと。

價格――左に列記せん、呉服物は、

小紋御召十圓より十二圓、縞御召縮緬四圓半より六圓、同上等七圓より九圓五十錢、市樂織八圓より十圓、同上等十二三圓より十五圓市樂風通織十圓より十一圓五十錢、繋絲織七圓より十圓、節絲織二圓五十錢より四圓、同上等五圓より七圓、糸織縞五圓五十錢より八圓、絢糸織九圓より十四五圓、山糸織三圓五十錢より五圓、結城紬五圓三十錢より六圓、銘線縞二圓五十錢より三圓五十錢、同上等四圓より五圓五十錢、縞八丈三圓五十錢より四圓五十錢、秋田八丈二圓五十錢より三圓五十錢、本場八丈三圓五十錢より五圓五十錢、黒八丈四圓五十錢より七圓、同上等八圓より十圓、黒七子五圓より七圓、同上等八圓より十圓、黒奉書紬四圓より五圓、黒縮緬七圓より八圓、同上等九圓より十一圓、小紋縮緬六圓より七圓、黒羽二重六圓より八圓（但し色物は上記の價格より五六十錢の下直と知れ）花色絹一疋四圓五十錢より七圓、緋秩父三圓より四圓五十錢、本紅絹三圓五十錢より七圓、

次に木綿物は、

瓦斯糸結城一圓より一圓五十錢、瓦斯糸市樂一圓八十錢より二圓五十錢、瓦斯糸双子一圓五十錢より二圓、同上等二圓二十錢より二圓五十錢、細双子一圓より一圓三十錢、絢双子八十錢より一圓地双子五十錢より七十錢、羽二重金巾四十錢より五十錢、同上等七十錢より九十錢、最上等一圓二十錢位、花色木綿四十錢より五十錢、花色眞岡六十錢より八十錢、花色金巾四十錢位。

銀婚式用花簪

來る三月九日は天皇皇后兩陛下の御結婚後廿五年相當につき銀婚御式を擧行あらせらるゝにつき府下は申すに及ばす遠き村里よりも種々なる獻納品を宮中に獻上するもの夥しく已に府下の官省、會社、銀行及一已人其他より獻納品陸續市中よりの趣向も略定りたる有樣なれば、當日は定めて先年の憲法發布式に劣らざる盛典ならんと今より想像せらるゝなり、扨當日兩陛下靑山へ御行幸の途次士女の拜觀を

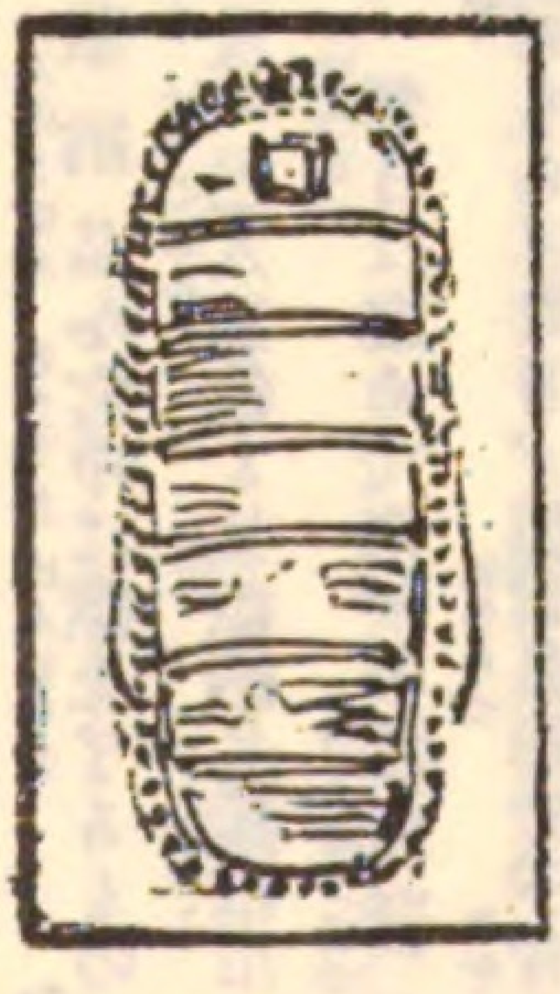
許させらるゝに就きては、小兒小娘と雖とも聊か祝意を表して寳壽萬歳を唱へざるべからず、京橋區尾張町白牡丹本家松田に今度新に賣出せる金モール花簪は恰も銀婚式用に好適する所あるより、祝日のかざしの花となさんと昨今早くも都下兒女間の流行品とはなりたりけり、其製作頗る精巧にして就中蝴蝶の作の如きは、動かさずして翩々自ら動き舞ふの趣ありて楚々たる風姿誠に愛すべし、之に亞ぐは菊花の細工にして、故を尙び古代菊を撰べる意匠面白し、其他蘭の幽香あり茶筅の雅趣もあり、其代價は銀臺金モール角脚蝴蝶三十五錢銀臺金モール洋銀脚古代菊十五錢、同角脚幽蘭十錢なりと、これは啻に今度の銀婚御式を祝する飾具に止らず、一般の禮式用に用ゐて甚だ高尙なるものなり、素より結髮、束髮、兩用に適す。

島田及唐人髷の飾物

これは暫時の流行かは知られど、十七八歳迄の兒女の島田又は唐人髷に壁チヨロ縮緬の丸ぐけ根懸を飾るもの追々見受らる、流行色は赤、鶸、藤色等なり、價は十錢内外のものならん。

板裏草履

麻裏草履は舊來より有來りなれども板裏草履とは是が抑なるべし、近來草履若くは麻裏草履若しくは雪駄の代に圖の如き板裏草履流行となれり、幷は圖樣によりて示さるゝ如く、表は駒下駄の疊に則り裏に板を打附け、五六所に一文字齒形を挽き歩行に便ならしむ、此流行品は麻裏の如く裏の切れて患少く



甚だ經濟的なるが故に平民社會に愛顧せらるゝに至りぬ、夫故價格の貴き品なく、革緒にて價十五六錢位の處最も需用者多しと、板裏草履は始め製作したりし時、表と裏と甚だ分離し易きを以て折角の發明も畫餅に屬したりしかども近來は表と裏の板の間に革を入れて釘留と爲したりければ、丈夫向には持つて來いの品とはなれりと。

時事一斑

銀婚式

三月九日は天皇皇后兩陛下御結婚の第二十五年に當れり。乃ち銀婚式を擧げさせらるゝが爲め、朝野の之を祝せんとするもの、其準備頗りなり。

新聞紙上の二流行

新聞紙頃者短評を試みざるものなし。以爲らく寸鉄人を殺す能はざるも、亦以て他を傷るに足ると。蓋し其宣告ありて説明を要せざるを利とするなり。

新聞紙頃者戯文を掲ぐるもの多し。以爲らく他を罵倒するに足らざるも、亦以て之を笑殺するに足ると。蓋し其眞面目に怒り來ると能はざるを利とするなり。

家庭的傾向

社會の眼は漸く家庭的となれり。世の風潮の先をなすべき新聞紙中、讀賣新聞は賢女傳を掲げり。新朝野は今泉うた子を傳せり。二六新報は跡見花谿女史を評せり。其甚しきは改進新聞が東都令孃鑑を載するが如きあり。社會の眼が家庭的となれるは可、而れども其傾向の必ずしも善き方面を指すのみにあらずして、善からぬ方面をも指すことあるを奈何せん。新聞小日本出でぬ。其道德主之を慨するものありて、新聞小日本出でぬ。其道德主義は保守的なれども、其風致を護持せんと欲するの意は亦壯なる哉。

戯曲

戯曲熱は漸く來り、嚢に言文一致の開祖たりし美妙齋は、再び戯曲作者の先驅たらんと欲し、早稻田文學亦頻に戯曲熱を煽げり。然れども今未だ花々しき現象あらんとも見えず。

哲學

哲學の流行は來りぬ、小部分に、而も地味に。

醜獄

相馬疑獄の一轉換たる錦織剛清等誣告の獄は其公判を開かれたり。而して之に繋累して横濱に誰知らぬものなき平沼專藏其人は僞證の罪として重禁錮一月罰金十圓に處せられぬ。

社會最近の顯象 其一

自助生

國事

明治廿七年の新光榮は、新曆の第一ページと共に開かれたり。而して大轉落より覺めたる如き眼は、社會一齊に見開かれたり。恐？懼？驚？喜？各種の情は合一して、却て無言と靜平とを作りぬ。

往昔、維新の改革始めて成りて、相共に事に改革に從ひたる二分子、即ち時に破壞を能事とし時に先驅を能事とする動の分子――進歩家と、時に建設を能事とし時に後殿を能事とする靜の分子――保守家とは、征韓論に於て衝突したりき。

征韓論者は向不見の進歩家にして、鷄林八道を蹂躙するの大愉快事なるを知て、國力の如何を問はざるものなりしなり。非征韓論者は稍憂國に過ぎたる保守家にして、泰西文物の盛に多少の驚を喫したるものなりしなり。

而して非征韓論者は勝利者となりて、退守政策を主とするの極、維新の大精神たりし萬機公論に決するの國是をも遲疑せんと欲し、征韓論者は敗者となりて、其議を國政に挿まんとするの極、民撰議院開設の意を發し、遂に國會請願となり、自由黨改進黨の勃興となり、國民を曠棄して藩閥の勝利者たりし在朝黨を窮追するや、却て其團結を强ふし、こゝに藩閥政府てふもの出で來りぬ。偶々在朝黨がすべて薩摩長藩の士なりしによれり。

其相攻守するの極、明治廿三年の帝國議會となり、藩閥政府は乃ち國民參政の權を讓與しつゝ、漸く維新大詔の意を實にしたりと雖、國民は其希望を彼等に由て實行するのみを以て自ら滿足するものにあらずとなし、併せて其廟堂獨占の權をも分たしめんとしたり。是の故に議會開設以來年として相交鬪せざるはあらず。

而るに之が攻圍者としては、所謂進歩黨聯合軍を作りて、自由黨大手に向ひ、改進黨搦手に向ひ、先隊已に胸壁に就き、吶喊して將に城に入らんとするに當り、大手の軍中忽ちに城內と相通するものありて寄手の敗軍となり、爾來交戰して解散となり總撰擧となりしも、其押寄せ來ろこ

さ變せず。而して城内にては各將交々出でゝ之に當り、最後に伊藤井上の老大將自ら陣前に顯れ、一方には寄手の大將を誘ひ、相應じて敵軍を碎破せんさ待かまへたりき。

何ぞ料らん寄手の陣中、敵に通ずるものあるを疑ふありて、戈を交ゆるに先ち先づ之を伐んさ欲し、議會始めて開けて星議長亨氏の信任を論じ、遂に之を陣外に放逐し、轉じて直に城内を砲擊せり。乃ち再び解散令下りて、寄手の面々は土を卷て重來せんか爲に歸り去り、茲に暮れて今年の騷擾さなりしなり。

明治廿七年の新春が、悲憫驚愕の中に迎へられたるは、是の故なりき。而して新春に入りては、多年の戰に疲れて頓足起ち難き樣の見ゑたるものもありしが、撰擧令出でゝ三月一日勢揃ひの期さなるや、再び氣を鼓して起つもの少なからず、今は却て最後の決戰を試みんが爲に大擧して寄せんず勢を現ぜり。

唯曩日正面の寄手たりし自由黨は却て城内の兵に黨するものゝ如く、却て曩日の城内黨たりし國民協會てふ保守の一派は、這般の戰が政費節減政務改革等の問題にあらずして、風紀問題若くは國權問題たりしによりて、寄手に加はり、今は形勢一變して、國政改革さ共に政黨改革の時代來りぬ。

斯くて政府は開戰の用意の爲に、昔熊本鎭臺が城下を火して籠兵を迎へたる如く、敵兵の附く所なからしめんが爲に、敵の口實さしたる官紀振肅の實を擧げて、後藤大臣を退けり。

偶頃りに衆議院解散の理由を明せさ叫ぶものあり。

農商務大臣榎本子の新任、金子同次官及び松岡内務次官の就職、伊東巳代治氏等數人の新勅選議員あり。知事の交迭あり。

巳代治は當日の幕中宰相なりき、今貴族院に入る。

貴族院中稍反動せんさ欲する色あり、谷近衞曾我の人々を首させる硬論者の多數は遂に書を伊藤總理大臣に贈て忠告する所ありたり。其意衆議院を理さして政府を非せるものなり。

是に於て伊藤總理大臣は之に答へて、衆議院解散の理由を明さしが、彼等は再び之に書を與へて駁議し、其說明に服せざる所以を陳述せり。兩個の衝突漸く迫りぬ。

一種の夢想者は以爲へり。幕末攘夷鎖港の難問題は口實なりき、今の政費節減條約勵行等の難問題は口實にあらざる乎さ。幕末正面の敵は眞成の敵にあらずして、間色の敵は眞成の敵なりき、今の當初の敵は眞成の敵にあらずして最後の敵は眞成の敵にあらざる乎さ。幕末執政の變動は一回毎に幕府の地盤を弛めき、今の内閣交迭は一回毎に藩閥政府の地盤を弛むるにあらざる乎さ。而して幕末の志士が當時の公卿を陽尊して維新の改革を成就したる如く、今の貴族院に結んで政府に迫らしむるものは亦之を假りて藩閥政府を改革せんさするにあらざる乎さ。

家庭雜誌第二十五號は特に一日を繰上げて銀婚式の當日即ち三月九日を以て發兌し記事を精撰し米僊久保田氏の筆に成る美しき繪畵を添へ以て祝意を表する所有るべし

國民之友

第二百十八號（二月廿三日發兌）

●國民之友○民心の統一○伊藤伯の復書○時勢變遷の徵●特別寄書○社會問題の眞相（二）…酒井雄三郎○豐太閤征韓論（續）…千山萬水樓主人●藻鹽草○一語千金○歸展餘事（三）思軒居士○新聞紙實歷（第三）…櫻癡居士●雜錄○チンダル氏の逸事（上）●史論○封建武士（第六）…停春樓主人●批評○經濟學史○最新學派經濟學○蠶種製造論○高尚なる佛教○英國撰擧犯罪處罰法○林政學○初等英文典○近刊雜書●當今之問題○地方問題○果して古人に耻るなき乎○福澤翁○罵るは愛するなり○日本の詩人歌ふて曰く○司法官の腐敗○梅花の總撰擧●海外思潮○加特力教の將來○遺傳と境遇○非社會主義●時事○伊藤伯の復書○復書に對する復書○英公使の更迭と條約改正○現內閣の對外方針を見るべき一事實○辭令書返戻○撰擧費の支出○兇器取締規則○所謂屬行○第二豫備金○撰擧干涉○寧ろ陳價なり○判事檢事官等俸級令○大隈伯は廢人なり○豪傑不用○自由黨の作り元氣○朝三暮四○最も白々しきもの○佛教と基督教○教科書審査の弊害○東北の商業學校○戲曲熱○哲學の流行○ラスキンの美術思想○無貫鐵道○天則博士も亦議院內閣の軍門に降る○胃田綱三何人ぞ○山口淳何人ぞ○海外時事○經濟事情○時事日記

定價一冊六錢十冊前金六十錢二十冊同一圓十錢郵稅一冊五厘宛廣告料一行金十五錢（行數回數により割引あり）

發行所　東京日吉町　民友社

德富猪一郎著

國民叢書第五卷

文學斷片

二月下旬出版

『文學斷片』とは何ぞや、雄勁の筆、清健の思想を裁せて、錦字繡句を爲し、簡篇潔章を爲せるもの是なり。『人物管見』に依りて著者の人物論を知り、『青年と教育』とに依りて其教育論を知り、『靜思餘錄』に依りて其思想を知りたるものは、更に此『文學斷片』を以て其精粹の鍾まる所を見ざる可からず、印刷既に成らんとす、讀者に見ゆる又近きにあり。

發兌元　東京日吉町　民友社

自第十三號至第二十號八冊合本

○家庭雜誌第二卷

定價四拾錢　運賃不要

右製本出來仕候に付五十冊を限り發賣致候間御注文奉願候

發賣元　東京日吉町　家庭雜誌社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

印刷所　東京市京橋區西紺屋町　株式會社秀英舍

明治廿五年九月十四日遞信省認可